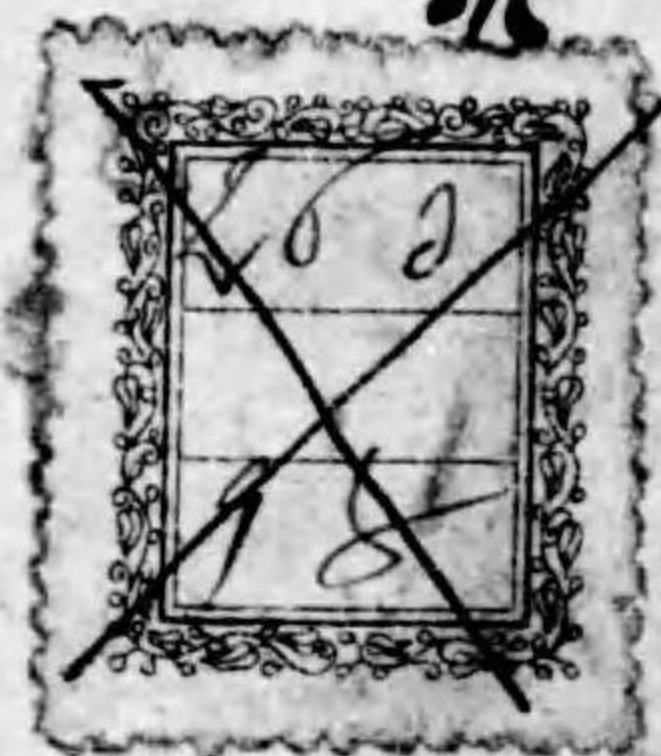




種百賣商
訣要の世渡

著生先々金

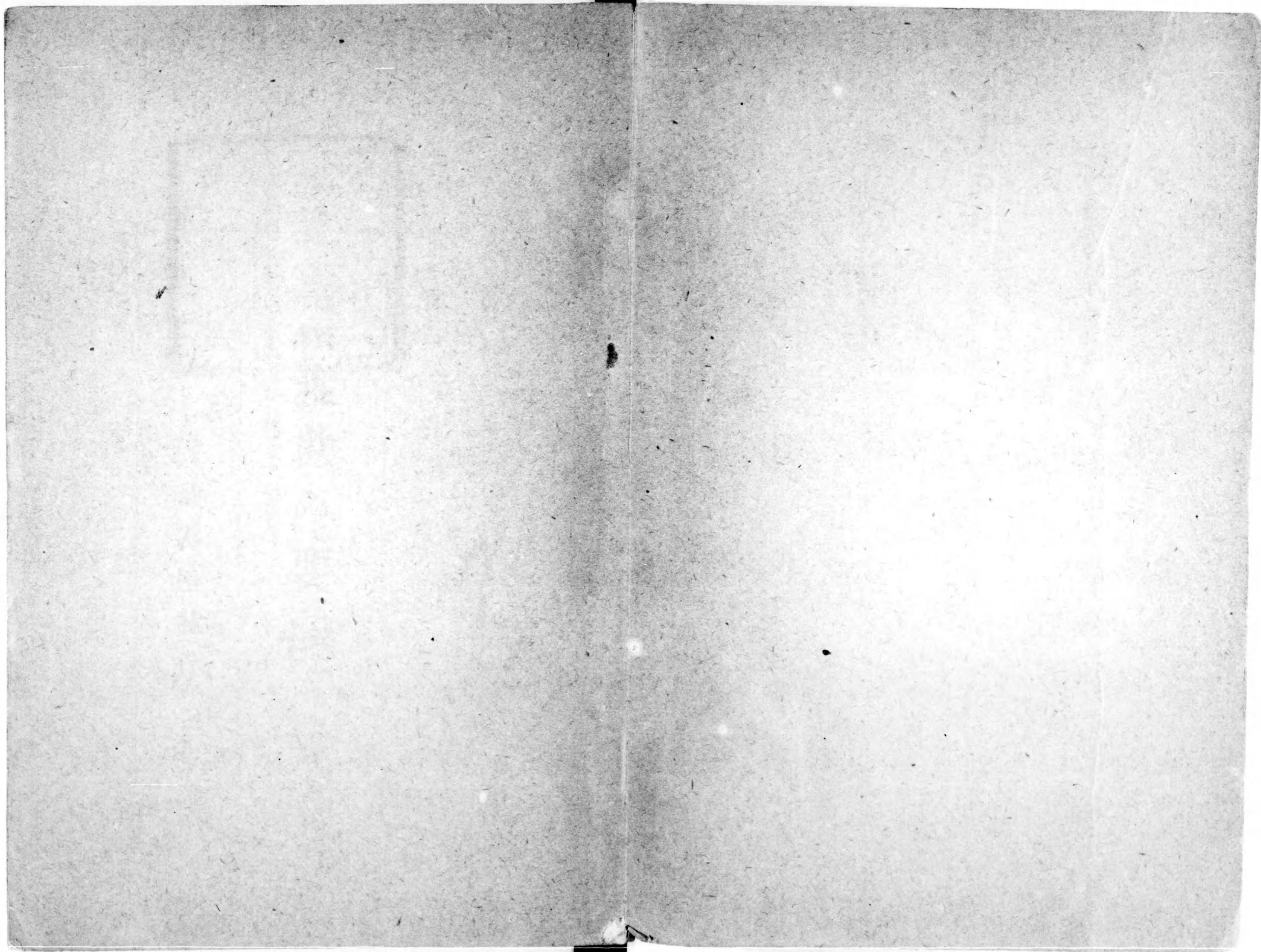
屋書泉雲



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





特102
87



金々先生著

百商種賣
渡世の要訣

雲泉書屋發行

大正
5. 4. 11
内交

百商種賣 **渡世の要訣**

目次

一 賣藥の通信販賣

- △當れば旨い郵便商賣……………一
- △一番儲かる婦人藥……………三
- △賣藥商の慣用手段……………五
- △郵便商賣の大眼目……………六

二 聲で儲ける鍋焼うどん

△咽が資本の鍋焼屋……………八
 △資本は僅かに六圓……………一〇
 △材料の原價と純収益……………一一
 △盛り場と書入時……………一三

三 確かで有利な荒物屋

△屹と儲かる商賣……………一六
 △資本と利益……………一七
 △仕入の秘訣と卸屋の内幕……………一九
 △素敵に儲かる商品……………二一

四 保険勧誘員の秘訣

△孫吳兵法の奥儀……………二二
 △人に依つて法を説く……………二四
 △勧誘表裏の懸引……………二六
 △勧誘員の収入……………二八

五 芝居の出方と其収入

△出方志願と株金……………二九
 △披露振舞と贈り物……………三〇
 △座付出方の収入……………三一

六 落語家と其収入

△前座時代の収入……………三三

△二つ目と中入前……………三四

△四百五十圓の收入……………三六

七 一風變つた蛇商賣

△蛇を馴らす法……………三八

△交尾期と寒暖の豫知……………四〇

△蛇の飼育法……………四一

△孵化期と蛇の相場……………四三

八 新派演劇の旅役者

△壯俳の役割と組織……………四四

△新派俳優の收入……………四八

△旅役者の日常生活……………四九

九 パン屋の職人

△小僧時代の修業……………五二

△一人前になるまで……………五四

十 資本要らずの鳥餌拾ひ

△廢物利用の金儲……………五六

△鳥餌拾ひの方法……………五八

△片手間で一圓以上……………五九

十一 釣魚師相手の餌商賣

△蛭捕りが一番流行……………六〇

△一日に二圓弱の収入……………六二
△半年に一年の生活費……………六三

十二 竹屋と竹の皮屋

△竹の種類と價格……………六五
△竹屋の儲けと符牒……………六七
△竹の皮の用途と賣行……………六八
△竹の皮屋の利益……………七〇

十三 海を相手の漁夫生活

△魚の種類と其組織……………七一
△漁夫と魚の捕り方……………七三

△漁夫の収入と賃金……………七四

十四 金魚屋と其飼育法

△金魚の相場……………七七
△金魚の飼養法……………七八
△金魚の種類と其収入……………七九

十五 人夫募集業

△北海道行募集屋……………八一
△募集屋の収入と利益……………八三
△募集屋の内幕……………八六

十六 淺草公園の餌料賣

△鳩の餌を賣る豆屋.....八七

△鯉にやる焼麩屋.....八九

十七 東京の塵芥掃除業

△驚く可き塵芥の分量.....九一

△請負人と掃除人夫.....九三

△掃除人夫と特別収入.....九五

十八 東京の黄金ばらひ

△得意先は花柳界.....九八

△資本不用の珍職業.....一〇〇
△便所の中に金時計.....一〇一

十九 犬猫相手の家畜病院

△五頭で百五十圓.....一〇三

△家畜病院長の魂膽.....一〇五

二十 横濱の海上人夫

△裸一貫の沖商賣.....一〇七

△他に見られぬ特色.....一〇八

△組織の長所短所.....一一〇

△海上人夫の生活.....一一二

二十一 荳專賣局の女工

- △誰でも出来る苧卷……………一二四
- △工女の年齢と収入……………一二六

二十二 製疊業と職工の収入

- △機械疊床と手縫疊床……………一二八
- △手縫と機械縫の暗闘……………一二〇
- △機械製疊と手職の仕上……………一二一
- △職人の所得……………一二三

二十三 活版職工の収入

- △新聞社附と工場附……………一二四
- △職工の種類……………一二五
- △鑄造と機械工……………一二七

二十四 手腕を要する結婚屋

- △媒妁屋と料金……………一二九
- △結婚屋の營業振り……………一三一
- △収益と手腕……………一三三

二十五 露店の氷屋

- △資本と準備……………一三四
- △氷水の製法と利潤……………一三六

△アイスクリームの製法と収益……………一三七

二十六 汽車中の呼賣屋

△車室が店舗……………一三九

△賣子と元締……………一四〇

△商品の仕入と収益……………一四二

△繩張と仲間入の手順……………一四三

二十七 謄寫屋と筆耕業

△裁判所の謄寫屋……………一四五

△親方と筆生の収入割合……………一四七

△筆生の資格と収入……………一四九

二十八 倍も儲かる飲食露店

△求資の腰掛け……………一五一

△花柳街と屋臺店……………一五二

△露店の資本と収益……………一五四

二十九 資本の要らぬ有利業

△疊業者の大敵……………一五五

△簡単な疊洗ひ……………一五七

△單獨營業の場合……………一五八

△大規模の洗滌業……………一六〇

△勧誘員の収益と副業……………一六二

三十 副業的の種苗販賣

- △農家の副業に好適……………一六三
- △種苗業の公德と責任……………一六五
- △營業法と資本……………一六六

三十一 本屋相手のせとり業

- △せどりの種類……………一六八
- △収益と資本……………一六九

三十二 乗るか外るか出版屋

- △出版屋と廣告法……………一七一

- △出版屋の資格と準備……………一七二
- △無資本成功者の實話……………一七五
- △最も手堅いやり方……………一七七

三十三 類の尠い筆翰商

- △筆の翰と其の需要……………一七八
- △筆の鞘となるまで……………一八〇
- △葎の豊凶と其収益……………一八二

三十四 煙管の羅宇屋生活

- △天秤屋と機械屋……………一八三
- △資本が二圓内外……………一八四

△羅宇屋は隠居仕事……………一八六

三十五 注文取と廣告取

△一種の仲介業……………一八七

△注文取の手腕と口錢……………一八九

三十六 ペストで儲ける鼠捕屋

△捕鼠器が資本……………一九一

△捕鼠器の掛け所……………一九二

△一日に一圓以上……………一九四

三十七 露店の繪葉書屋

△資本が五圓以上……………一九五

△季節物と紀念物……………一九七

△枝折と福袋……………一九八

△利潤の割合……………一九九

三十八 露店の古本屋

△無愛想で通る商賣……………二〇一

△顧客と仕入品……………二〇三

△季節と場所……………二〇四

△古本屋の利益と副業……………二〇六

△出店場所の賣買……………二〇八

三十九 輸出向の更紗業

- △更紗と歐洲戰亂……………二〇九
- △職人の所得と生活……………二一〇
- △仕上ぐるまで……………二一一

四十 素麵の製造業

- △素麵の本場と産額……………二一三
- △素麵職人の技倆……………二一四
- △製造上の準備……………二一五
- △天候と原料の關係……………二一七
- △素麵の仕上順序……………二一八

四十一 有利なる製劑業

- △賣藥の需要と醫術……………二一九
- △小資開業の順序……………二二〇

四十二 一種特別の養蠶業

- △蠶の生産と需要……………二二三
- △養池の構造と食餌……………二二五
- △産卵と孵化……………二二七
- △外敵防禦と収益……………二二九

四十三 折箱の製造業

△折の種類と需要……………二三〇
 △折の材料と仕入先……………二三一
 △折の相場……………二三三

四十四 縁日の植木屋

△縁日商人の呼吸……………二三五
 △露店の場所と盛り時……………二三八
 △思はぬ利得……………二三九

四十五 小兒相手の玩具商

△兒童の模倣性と玩具……………二四一
 △玩具の種類……………二四二

百種賣 渡世の要訣目次終

△小賣と小物の利歩……………二四三
 △問屋と製作所……………二四五

商賣 百種 渡世の要訣

金々先生

一 賣藥の通信販賣

△當れば旨い郵便商賣

(1) 賣藥通信の樂賣

郵便局や配達仲間で、俗に「郵便商賣」と稱する通信販賣がある。これは新聞廣告や郵便を利用して、物品を賣つける商略で、近來益々廣く行はれるやうになつて來た。寫真機や、謄寫版や、蓄音機商などで此方法で行つてゐるものもあるが、最も多いのは賣藥の通信販賣である。そ

れ故先づ賣薬を中心として、其内幕を解剖するが、一つ當ればこれほど
旨い商賣は他に多くはない。

一口に賣薬商といふ中には、堂々と店舗を構へて眞面目に通信販賣
を營んでゐるものもあれば、又一方には裏長屋のやうな所に形式ばかり
の看板を掲げて、詐欺同様の不正手段を行ふて居る奸商もある。だか
ら玉石混淆した事は言へぬが、一般の方法を説明すると、最初病名の容
態と、薬の効能を大袈裟に吹聴した説明書を作つておいて、それから新
聞なり、雑誌なりに廣告をする。その方法の如きも初めから薬名定價
を記す場合もあるが、そんな事を一切記さずに、説明書で客を釣るのが
多い。例へば肺病の薬なら、肺結核の怖るべき状態を説き、次に「然れど
も肺病患者は失望する勿れ、茲に〇〇先生が多年の苦心と實驗とによ

つて、肺病必治の新療法が発見せられたり、同病患者は郵券二錢封入速
に申込まれよ、新治療法を詳しく説明せる書冊を無代進呈す」といふや
うな廣告を新聞雑誌に出す。すると不治の難症に悲觀しつゝある患
者は、薬を賣つけられるのとは知らず、天の與へと喜んで申込む。その
説明書にどんな事が書いてあるのかと云へば、肺病の症状から説き起
して、結局新薬発見云々を誇大の効能で述べてある。之を讀む者の中
には、何だ山師賣薬かと唾棄するものもあるが、地方の正直者は直ぐに
爲替封入で注文をして来る。そこで營業者は占めたと商品を小包郵
便で發送する初めから終りまで全く郵便によつて商賣をするから、彼
等配達夫は即ち稱して郵送商人と云ふのだ。

△一番儲かる婦人薬

賣薬の通信販賣にはいろいろの種類の類がある。一寸書き立て見ると肺病薬、腦病薬、淋病薬、梅毒薬、胃腸病薬、婦人病薬、月經薬、脚氣薬、耳病薬、癩病薬、強精薬、毛生薬、白色薬、わきが薬、耳の薬、どもり薬、豊の薬、赤毛縮れ毛の薬、瘦せる薬等數へ切れぬ程あるが、此内最も多いのは肺病、淋病、梅毒薬で、之に次いで月經薬、子宮病薬、腦病薬といふ順序である。そして一番通信販賣の有効なのは、月經薬、子宮病薬、花柳病薬、肺病薬等であるが、何分にも類が多いので、營業者は骨が折れるさうである。然し廣告さへ盛んにすれば、眩度成功する。何故かと云へば、子宮病、月經、花柳病等すべて生殖器に關する病氣は、患者自身が公然と醫者に行き難い。成べくなら秘密に治したいと云ふところから、自宅療法の説明書などを取寄せる通信販賣者は、そこが附目なのである。殊に月經薬の如き、墮胎

を暗示したものは、尙更通信の効力が著しい。或同業者の話によると、三ヶ月位の妊娠は、其薬を飲んだら墮胎するかなど云つて、あからさまに照會して來る婦人があるとの事だ。以て社會暗黒面の一斑を察する事が出來やう。

△賣薬商の慣用手段

それから此通信販賣は、どの位の比例で賣れるものかと云ふに、藥の種類によつて率の差はあるが、先づ平均照會數の一割五分位に相當する。即ち百人説明書の申込者があれば、其中十五人は薬を注文して來る事になる。そして最も率の多いのは、月經薬の二割、一番少いのは肺病、淋病、梅毒薬等で、之は八分位にしか當らぬ。

さうかと思ふと前記の癩病、吃音、聾縮れ毛の如きは誰が考へても賣

薬で治らうとは思はれぬのに、それでも一割以上の注文者があるとは、實に世間は廣いものと云はねばならぬ。現に赤毛癖毛直しといふ効きもせぬ薬を賣出して、僅か半年ほどの間に五千圓から儲けたものがあるさうだ。そして此の通信販賣は何れも其手段は略ぼ同一である。自分が永年腦病なら腦病に苦んだ爲に、どうかして治したいものと苦心研究の結果、遂に一大奇薬を發見して其薬で全治した。そこで世の同病者を救ひたいと云ふ同情心から廣く一般に頒つ事にした。論より證據茲に全治者から來た禮狀がこんなに澤山あるなぞと眞實しやかに説明した印刷物を送るのである。ところが此の禮狀なるものは、知合の人に頼んで書いて貰ふので、眞物は殆んど無いと言つてもよい。

△郵便商賣の大眼目

前にも云ふが如く、當りさへすれば此の郵便商賣ほど旨い金儲けは他にあるものでない。藥九層倍どころか、五十倍にも百倍にもなるのである。収入印紙を除いて容器から包紙、一切合切十圓の原料があれば、確かに三四百圓分の賣薬が出来る。婦人薬で有名な某薬店の如きは、此の通信販賣を始めて二十年と経たぬ間に、數十萬の資産を作つたこのことである。實に一攫千金とは此事であるが一方に成功者があれば一方に失敗者がある。儲ける者も多けれど、失敗する者も尠くない。

要するに通信販賣の成功と不成功とは賣薬其物の効能よりも、廣告法の如何である。説明書の巧拙である。廣告文が一寸巧みで人の注目に價しても、肝腎の説明書が拙かつたり、山師が、つたりしてゐては

直ぐ嘘と感づかれるから注文する者はない。さうかと云つて、廣告法が拙くて人に何等の刺戟を與へぬやうでは、テンから郵便商賣にならぬ。だから百萬圓の資本を投じてやつても、廣告術が死んでゐては結局費用倒れに終らねばならぬ。之に反して今自分の懷中に十圓しか金がない。此十圓を資本に一つ通信販賣を始めやうとする場合に、假令五行か十行の小廣告でも、巧く人心の機微に投じさへすれば其薬は屹と賣れる。必ず郵便商賣は成功する。歸するところ、通信販賣の眼目は廣告術で、その資本は廣告にある。

二 聲で儲ける鍋焼うどん

△咽が資本の鍋焼屋

「鍋焼うどん——」の呼聲は、二上り新内の流しに次いで寒夜の東京を詩化する一種の聲樂である。中にはあの透通つた身に泌みるやうな聲に惚れて、食べて見やうといふ氣になる人があるさうだ。随つて鍋焼は節廻し巧みに、聲の好い者ほどよく賣れる。新米のホヤ／＼は却却あの調子が旨く出ないので、老練家が一晚に百五十玉も賣る所を、五十玉も六ヶ敷いさうだ。所謂聲で食はせる商賣である。

うどん屋の本場は、京橋八丁堀に本所、太平町附近、此の二ヶ所だけでも冬になると五百人からの鍋焼屋が出来る。その他市内全部を合したら千五百人以上もあらうとのことだ。何しろ東京名物の一つであつて、割合に儲かる際、物稼業であるからだ。

此の多くの饅頭屋の中には、夏分豆賣や甘酒屋をしてゐて、冬になる

と鍋焼に化ける者も尠くないが、其大半以上は信州の北部、越後地方から冬場だけ出稼ぎに来る若者である。雪の降る北國では秋の末から春三月雪の消える頃まで全く百姓仕事が出来ない。そこで十月中旬頃から上京して、寒い季節だけ、聲を資本に儲けやうとするのである。

△資本は僅に六圓

さて鍋焼屋を始めるに、第一に必要なのはその屋臺である。自前で餛飩を製造して賣りに出るのは別として、受賣する者は大抵うどんの間屋から、一ヶ月十錢位で屋臺を賃借するのである。尤も自分で作るにしても、上等物で四五圓、安いのは四五十錢でも出来るが、出稼ぎ者が多いから新に造る者は減多にない。その代り食器類は自辨で、これだけはどうしても買はねばならぬ。昔は眞物の鍋焼で、温めた土鍋のま

ま客にすゝめたものであるが、今では蓋附の小綺麗な茶碗に改良された。けれども中には土鍋でないと鍋焼の味がせぬなど、通がる客がある。ので之は二通り備へておく必要がある。そこでざつと是等の器具代を見積ると、一個五錢の土鍋が二十個で一圓。一個十五錢の蓋茶碗が二十個三圓。うどんを暖める鐵板鍋一個十錢、平均十個で一圓。其他箸、盆、煮汁入等が五六十錢、總計六圓あれば澤山である。

次に經常費、即ち日收仕入れる原料の資本は、大方左の如きものであるが、之は一時に纏めて買うにしても、又は毎日小買をするにしても、本人の都合次第であるから、茲には餛飩百五十玉を標準として、一日の平均出費高を記すことにする。

△材料の原價と純收益

そこで其の日に仕入れる材料と、その原價を列記して見やう。

一、九十錢(一玉六厘の原價)餛飩百五十五

一、二十錢 醬油五合

一、十五錢 鯉節消費高

一、十錢 味淋一合

一、十錢 砂糖消費高

一、十錢 炭消費高

一、三十錢 蒲鉾、海苔、野菜

合計一圓八十五錢

此の一圓八十五錢を百五十に割ると、鍋焼うどん一膳の原價一錢二厘強にしかつかない。それを一杯三錢に賣るのであるから、若し百五

十玉賣切つたとすれば四圓五十錢の賣上高、そこから原價の一圓八十五錢を引去つて、一晚の純益二圓十五錢之を一ヶ月に合算すると約六十五圓になる。其収入は下手な奏任官に相當するが、然しさう旨く行くものでない。照降商賣だけに雨の降る晩は出られぬ。それに百五十玉賣るといふのは、餘程常得意を澤山持った鍋焼屋でなければならぬ。平均したら百玉位のものであらう。假に百玉賣るとしても、一杯の原價が一錢二厘強であるから、それでも一圓八十錢ほど儲かる。此の内降雨で一月に五日休んだとして、優に四十圓以上の收入がある。官吏だなんて威張つて髯を引ばつてゐる連中よりは遙かに樂な生活が出来来る。

△盛り場と書入時

鍋焼うどんを賣る方法と云つても別に六ヶ敷い事はない。誰にでも出来る商賣だ。夜は遅くなるから午前十時頃に起きて朝飯を済ませ、それから問屋へ餛飩の玉と原料添ひ物の買出しに行つて来て晩の仕度をすればよいのだ。うどんの中へ入れる添ひ物としては薄つべらの紙のやうな蒲鉾が一切竹輪蕨が二つ、それに三ツ葉のやうな青い物を泳がせて海苔をフワリと浮かせる、鍋焼餛飩の拵へ方は唯だそれだけである。そして夜の八時頃から出かけて、「鍋焼うどん——」其間に技術もなければ秘傳もない。呼聲と節廻しの好いのが彼等の身上である。

東京で一番よく賣れる場所は、彼等の巢窟たる八丁堀本所を最とし次に兩國濱町、蠣殻町、人形町、芳町、それから淺草方面では公園附近、神田

では柳原一帯。一晚に百五十玉内外も賣れる所は先づ此邊で、山の手は半分位と思はねばならぬ。そして鍋焼屋の書入とも云ふべきは火事のある晩で、半鐘がチャン／＼と鳴出すと、どんな遠い所へでも駆つけて行く。火事場だけで五十玉や百玉は忽ち賣けて了ふ。シコタマ儲けるのは火事の晩である。

客種は待合藝者屋、白首等が第一のお得意で、之に次ぐのは職人、學生、車夫。そしてどんな不景氣な晩でも、彼等の純益は一圓を下る事はない。金儲けの嫌ひでない諸君は、生じツかの安月給取を望むよりも、須く鍋焼屋たるべしだ。

三 確かで有利な荒物屋

△吃と儲かる商賣

百圓以下、五六十圓の小資本で貸倒れも出ず、確かに二割以上儲かる商賣は荒物の小賣業である。之はその開業地によつて多少趣きを異にするが、東京でも下町の荒物店は裏通りにでもなると、荒物の外に硝子箱の中へ駄菓子でも入れ、パイ、獨樂、肉桂、風線、香花火などを備へて子供の需めに應ずる店が多い。又貧民窟の荒物屋になると、駄菓子は勿論、蜜豆に文字焼、當物などを置いて子供の遊樂クラブとなし、駄菓子と荒物と、どちらが本業か分らぬのがある。

山の手の荒物店は荒物以外に、煙草、巻紙、封筒、砂糖、白粉、石油、手拭等大抵な品物を準備して、一軒で何でも間に合ふやうな風にしてある。之は地方の小都會でも同じ事だが、品物が多くなればなるほど手數では

あるが、客足を引くに都合がよい。荒物の二字に束縛される必要はないのだから、營業上その方が有利であらう。

その兼業としては、油類、葺屋、葉茶屋、貸本屋、何でも差支へない。それに良いことには、全くの素人が始めても直ぐに取りつき易いのが本業の取得である。

△資本と利益

そんなら荒物屋を開業するには何程の資本を要するか、勿論規模の大小にもよるが、先づ賣藥、受賣の看板の二三枚もかけ、硝子箱の飾臺を並べて、不完全ながら化粧品類、糸針、筆墨紙、荒物類を並べておくには、九尺間口で八九十圓の資本を要する。この外に飾棚、引出し、戸棚等があれば、申分はないが、然し店の半分に駄菓子でも並べてお茶を濁す程度

にすれば三四十圓でも立派に開業することが出来る。そこで荒物商の利益は二割五分といふのが通例である。値の知れてゐる鉛筆化粧品石鹸の如きは殆んど原價で賣らなければならぬ物もあるが、その代り又二三倍四五倍に賣れる物もある。殊に子供相手の駄菓子には四割の利益が普通である。それに菓子は廢物が出ないから之を兼ねる荒物屋が多いのだ。

荒物店で賣つて割に合はぬのは、今戸焼の炮烙七輪大和火鉢の類である。之は時々粗々をして壞すので、口錢をフイにする事があるからだ。次に縫針で汗手で弄られると直ぐに錆て賣物にならなくなる。それから箆類も店晒しになると色が變つて賣にくくなるから、之も餘り澤山仕入れぬ方がよい。

△仕入の秘訣と問屋の内幕

東京市内の荒物も賣店では、その仕入法が二種ある。即ち問屋から仕入ると、車を曳いて卸して歩く所謂曳屋と稱するものから仕入ると、かう二通りある。

車を曳いて卸して歩く人は、無論資本の澤山ある者でないから、其商品は直接生産者から仕入るのではなくて、市内の問屋から仕入れたのを卸して歩くのである。それ故一寸考へると、途中で仲買の手を経るやうなものだから、問屋から直接に買ふよりは幾らか高くなければならぬ筈である。ところが實際に於て問屋よりは却つて安いから不思議なのだ。

之は荒物に限らず、何の商賣でも同じことだが、問屋は成べく品物を

多くこなしたいたいのが山々だから、少し取引をして見た上で、この位は貸しても大丈夫だと見込めは、五十圓の金に百圓の品物を貸してよこす。場合によつては賣上げ勘定で、只でも貸して呉れる。さう云ふ問屋から仕入る曳屋だから、堅くさへ營業すれば全で借りた金で商賣が出来る。その代り拂ふべき期日にはどんな工面をしても拂はなければならぬ。此の正金の必要の迫つてゐる時には、原價と口錢率とに構はず、現金にさへなればよいと云ふので、問屋への信用緊ぎに少しも儲けなしで賣つて了ふ。

此際小賣店にして、右から左現金買をするつもりならウンと殺して安く買へる。曳屋の方でも質をおいたり、高利の金を借りてまで問屋に仕拂ふよりも、商品で融通した方が樂だから、出来るだけ安く卸して

了ふ。これが問屋より仕入るよりも幾分安い理由なのである。

△素的に儲かる商品

又曳屋でなしに、直接問屋へ仕入れに行くと、問屋は得意を殖したさに、最初の第一回は必ず特別に勉強して安くする。けれども二回三回と行く中に、元方が高く上げるとか、或は品物で落したりする。然し此方で金拂ひがよいと問屋でも自然に貸してよこすやうになる。貸せと言はずとも、向ふから『どうぞ賣つて頂きます、御勘定は御都合で宜しう御座います』など云ふて貸してよこす。

荒物屋で小賣をする品物の中で、殆んど何十倍となく儲かるのは箸類である。百膳二十錢位の塗箸を、一膳四五錢に賣つても、買方では別段高いとは思はない。着色紫檀黒檀の箸は大が四十錢の原價であ

る。それを一膳どんなにしても十銭に賣れる。實に馬鹿々々しく儲かるものである。箸は元來度々買ふものでなく、又日々口にあてるものだから、誰でも幾等か奮發して買ふ氣味のものである。それに値段の見當が更に分らない物なので、寧ろ少し位高く言つた方が、良い品だと思つて買つて行く傾きがある。兎に角確實な商賣で多くの資本を要せず比較的儲かるのは、此の荒物小賣商である。

四 保險勸誘員の秘訣

△孫吳兵法の奥儀

一口に保險と云つても、實際勸誘員の必要のある會社は生命保險だけである。海上保險や火災保險の如きは、何人もその必要を認めてゐ

るから、此方から勧めずとも、被保險人の方から進んで申込んで來るところが生命保險に至つては然うは行かぬ。西洋などでは飲酒家は望んでも被保險人にせぬと力んでゐる位だが、保險思想の普及せぬ日本では、未だそれどころか、十回二十回勸誘員がお百度を踏んで勧めても先づくと斷わる人が多い。それだけ外交員の骨の折れる事は想像以上で、實に一通りならぬ苦心と秘訣とを要するのである。

孫子、吳子の兵法の奥儀は己を知り、敵を知るにありと云ふが、保險勸誘術にもまたそれが必要である。即ち被勸誘者の人となりや、又氣分を呑込むといふのが成功の第一要件である。この要件さへ満たせば、成功か否かは大抵見當がつく。然しこの相手方の人となりを呑込むといふ事が容易ならざる難事である。豫て交際しつゝある人なら何で

もないが、全く一面識もない、或は出逢頭に顔を見合した位の人に、一片の名刺紹介を以て行く場合などは大に研究せねばならぬ。折角紹介を貰つても、單に貰つたわけでは多く効がない。同時に出来るだけ詳しく先方の人格氣質、好尚等を聞いて、それによつて策戦方略を定めなくてはならぬ。それには先づ人を見て法を説くといふ事が肝要で、頗る呼吸ものである。例へば先方が文學者だから、文學の話でもよくしたら喜ぶだらうなぞと、生かじりの文學談などやらうものなら打壞しである。恰も實業家に金利を説いて、保険を勧めるやうなもので、一喝の下に拒絶されぬのが仕合せな位のものである。

△人に依て法を説く

大抵の人には何か一種の道樂又は横好きと云ふものがある。第一

に捉ふべき鍵はそれである。然しこれとても先方が謠曲を好くといふので、豫め謠曲の話を作つて行くなど云ふのでは効がない。幸に應接室へ通されたならば、その間に機敏に頭を働かせて巧みに話の緒口を見つけてなくてはならぬ。この待たされる間をボカンと空費するやうでは駄目だ。

應接室を一通り見れば、凡そこの主人の嗜好を察せられるものである。茲に豫て聞いてある事と比較想像して、その調度、掛軸、床の置物等に就て話頭を捉へて置く。いよく主人に面會しても、成べく保険の事は避けて、寧ろ先方に興味ある話頭を長くするやうに仕向ける方がよい。さうかと云つて何人にも知れ切つた事を空々しく話するのは却つて内兜を見透されるものである。此方の隙を見せるのは大の禁

物である。即ち實際價值ある、而も先方の好尚に吻合する所に話題を見出さなくてはならぬ。要するに趣味を廣く養成しておいて、どんなお話が出ててもマゴつかぬやうにするのが何より肝要である。

△勸誘表裏の懸引

之と全く反對に、此家の主人に何等の道樂もないといふ場合には、比較的閑さうの人であつたならば、一寸その人の職業上の事などを聞くとか、或は保險勸誘の困難な事を語るとかする。けれども非常に劇職にある人と見たならば、手ツ取り早く來意を告げ、「貴下が五千圓加入して下されば、自分は何程の手數料になるから入つて貰ひたい。かう申上げると、唯だ、私が手數料さへ貰へば、あとはどうでもよいやうに聞えるが、決してそんな譯ではない」と、そんな譯ではない理由を卒直に

赤裸々に、而して更に普通保險といふ事は、誰でも承知してゐるやうに思つて、その實案外誰にも解つてゐない點だけを出來るだけ詳しく、出來るだけ簡單に述べるのである。

終りに附加へて置きたい事は、或人は「これは少しく困難だと思ふ場合には、殊更にその人の不在の折を見て行き、次には又その人の差支へのある場合を見て行き、又その次には未だ寝てゐる頃を見計つて行き、斯くわざと行きながら成べくその主人に逢はぬやうにして、氣の毒だと云ふ位の注意を惹起さしてから逢ふ方がよい」と云つてゐるが、之は大に考へものである。幸に此方の小策を先方が氣附いて、氣毒などと思ふて呉れれば、善いが、反對に小策を弄する卑劣の男だと思はれては結局不成功である。故に餘り見え透いたやうな小策を弄したり

辯問的の動作を取るのには最も宜しくない。

△勧誘員の収入

すべて外交員は何の職業に限らず、服装が大切であるが、殊に身装を飾らねばならぬのは、新聞社の廣告取りと、此の保険会社の勧誘員である。それ故之を勧める人には衣服調度が一種の資本である。さてそんなら収入はと云へば、之には有給と無給とあつて、初めは大抵無給で歩合だけである。その歩合はと云へば、会社によつて多小の相違はあるが、平均總金額の千分の十五が普通だ、即ち保険金千圓につき十五圓の手数料になるから、一ヶ月二千圓の被保険人を作れば三十圓、三千圓なら四十五圓、一萬圓作れば百五十圓の月収になる。けれども追々被保険者の種切となつて、一ヶ月三千圓以上作るのには容易のことでない

然し二千圓位の成績で、六ヶ月以上会社に勤続すれば、始めて正社員として給料が貰へる。その給料と云つても、僅かに一ヶ月十五圓内外であるから、こんなのを宛にするやうでは駄目だ。飽まで勧誘上の成功を基礎として、手腕を磨いて行くやうにせねばならぬ。

五 芝居の出方と其収入

△出方の志願者と株金

芝居者に株金といふも可笑な話だが、現に留場、即ち出方仲間には之を實行しつゝあるのだ。先づ現在市内各所の大小劇場で使はれてゐる出方は、志望者の数が多くて、定つた人員の外は許さぬ規定になつてゐる。そこで希望者は此の空株のある時留場頭へ申込むといふ手続き

であるが、芝居によつてその株金に相違がある。日本一の劇場と稱する歌舞伎座が五十圓、それから新富座が三十圓といふ相場、これを標準として客種の好い座ほど高價と見れば間違はない。そして此の株金は退座する出方が貰ふ事となる。又新参者は座方に對して披露をするのだが、その披露たるや、表面は文明風を粧つてゐても、内幕に入ると根が舊慣墨守の芝居者のことだから、何の彼のと多大の費用を要する事になるのだ。

△披露振舞と贈り物

新参者が座附留場になると、仲間の者を招待して披露をするのだが、それは座方によつて頭数が違つて来る。歌舞伎座は五十人、新富座は三十二人といふ勘定。そこで小劇場ほど場内が狭いから留場の人員

も少い。随つて披露振舞や株金も安直となるのだ。假りに一人につき二圓平均の散財をしたところで五十人なら百圓、それに表方や留場頭へ習慣として鼻薬を贈ることになつてゐるが、留場頭へお酒の三つ割一樽、表方の座手代とか帳元とかへは、十圓位の呉服切手を奮發せねばならぬ。極く安直に見積つても、大劇場附の留場となるには、百五十圓の資本を卸さねばならぬ。

△座附出方の收入

座附出方の收入は劇場の中位を標準として算盤を取つて見る。先づ客の飲食物から云ふと、之は定價表が出来てゐて、一厘も横着の出来ぬやうに座方で取締るから、さういふ側では儲からぬ。そこで出方の公然收入となるのは辨當で十錢、鮎で二錢、菓子で一錢といふ割。看客

が菓子辨當鮎をとると、留場は一人について十三銭の手数料になるのだ。此外に小物と稱して座布團火鉢茶繪本等に對する十五銭の利益がある。で出方が一人の客から二十銭平均を得たとして一日十人案内すれば二圓二十日間興行として四十圓の収入である。

現今では何處の劇場でも大抵切符制度で、それ以外祝儀とか小釣とかを客から貰はぬ事になつてゐるが、それは表面だけで、事實に於ては矢張り舊習が行はれてゐる。その看客から留場にやる祝儀は釣銭以外五十銭から一圓位が相場。で狂言が當つて大入の時は非常な収入がある。賣切續きと來たら二十日間興行で二百圓も儲かる事がある。だから留場は一種の水稼業で、一度足を踏込んだら奈何しても止められぬとの事だ。けれども若し不入と來たら實に慘目なもので、漸くそ

の日の辨當代に有りつく位のものである。然し彼等は「大入」といふ空想を抱いてゐるから、不入な時でも餘り落膽しない。それに新年は何處の劇場でも大抵客足が多いから、多小の借財は春興行で目鼻がつくものとしてゐる。それが出方の書入時なのである。

六 落語家と其收入

△前座時代の收入

先づ茲に落語家志願の者があると假定する。素人時代から崇拝してゐる真打とか師匠とか相當の人物を見立て弟子入をする。最初は勿論素人だから給料はない。少しく修業が出來て前座に出る様になると、定給と云ふて一日四十銭から五十銭位給されるやうになる。此

定給なるものは前座と下座とに限られたもので、入りの有無に拘はらず、必ずこれだけ貰ふ事になつてゐる。その代り自分の真打席一軒だけで、無論掛持を許さない。日の暮れぬ中から寄席へ出かけて行つて、広い席へ一人か二人、事によると壘を相手に覚え立ての落語を以て御機嫌を取結び、それから他の落語家の羽織を引いたり、布團を敷き返したりして閉場るまで居るのだ。掛持がないから電車も一往復だけで済む。都合によつて近い所だとそれさへも助かる。四五十銭の金は少いけれど、前座時代は交際がいらぬから割合に樂である。

△二つ目と中入前

前座を二三年辛棒してゐると、技倆次第で二つ目と云ふのに昇進する。此の二つ目になると、最早定給の恩澤に浴する事が出来なくなる。

その代り給金が定められる。昔は文久、即ち一厘五毛に限られるものだが、今では二厘五毛から三厘位まで給されるやうになつた。そして師匠の持席を二つ位掛持する事になる。平均三厘と見て、百人入りのある席を二軒掛持すれば六十銭。前の前座時代と餘り收入の相違はない。その上掛持となると電車も一往復では間に合はぬ。服装の如きも前座時代よりは吟味せねばならぬ。位置は上つても收入は上らぬ。のみならず支出が多少嵩むから、此の二つ目が最も割の悪い時代である。そこで一日も早く中入前に昇進せんとあせるのもある。二つ目の割の悪い時代を辛棒して中入前に昇進するまでに二つ目と中入前との間を通過せねばならぬ。其時は寄席も入りのある所へ廻されるから、苦しい中にも幾分か息がつける。それから中入前にな

ると、給金も三厘五毛から四厘に上つて最早真打候補者となるのである。之が又前座から二つ目に昇り立てると同じく位置は上つても儲けが澤山ない。何故かと云へば掛持も三軒乃至四軒位になるから、電車の往復では間に合はぬ所も出来る。そこで人力車を雇ふと、一晩安くても六七十銭は取られる。そして服装も無論二つ目程度のもものでは高座へ上られぬ。だから一夜一圓五十銭位の収入があつても、半分は費用倒れになつてしまふ。

△四百五十圓の収入

中入前を通り越すと今度は真打となるのである。真打と云へば藝人として出世の極度のやうに思はれるが、同じ真打でも所謂ピンからキリまである。中入前の昔の苦しい所を通り抜けて、師匠も許し、定連

寄席などでも先づこれならばと云ふ事になれば真打の披露をする。と同時に部割も五厘位になる。然し近來は真打が粗製濫出せらるる結果デモの真打があつて四厘五毛位にしかならぬ者もある。之に反して好い真打になると、五厘以上等級によつて八厘位まである。七厘から八厘取るやうになると、すべて都合よくなつて、席に良い所を三つも四つも掛持するやうになるから、収入は益々多くなる。そこで自分の真打席では定つた七厘乃至八厘の外に看板料として餘分の収入があるから、表面は八厘でも實際は二銭から三銭位になる。ところがデモ真打だと前の方へ大きな看板の人を助に頼まねばならぬから、表面は六厘でも實収入は五厘位にしか當らぬ。そればかりではなく、いよゝゝ入りのない極點になると、自分の懐中から足らず前を

吐き出さねばならぬ事になる。そこで現今収入の最も多い落語家は柳派で小さん、柳枝、三遊派では、圓右圓藏等である。中にも小さんは十圓の座敷が平均一日に一つ宛あるといふから、一ヶ月四百五十圓の収入がある譯だ。落語家の志望者は一生懸命に腕を磨いて、せめて百圓以上取るやうにならなければ駄目である。

七一風變つた蛇商賣

△蛇を馴らす法

世の中に變つた商賣は可なりあるが、蛇商賣といふのは餘り類がない。偶に山から蝮などを取つて來て賣藥屋へ賣つけるのもあるが、それはホンの片手間の仕事で本統の營業ではない。茲に云ふのは、あら

ゆる蛇を飼育して、興行師、賣藥屋、黒燒屋、其他に賣捌く、一風變つた營業である。尤も之は需要者が尠いだけに、専門にやつてゐるのは東京にも二軒しかない。一軒は南千住の金さんと云ふのと、今一軒は下谷龍泉寺町に住む杉田寅吉といふ人である。本記事の内容は主として寅さんの話である。

そこで蛇を飼馳らすには、サデといふ玉網を用ひる。最初鎌首を持ち上げて向つて來やうとする奴を、此のサデで柔かく抑へ、すると次第に温順しくなる。それを親切に扱つてやると段々その人に懐いて膝の上や肩の邊へまつはるやうになる。又見世物に出す時には、板圖ひの中に入れておくが、奴さん時々その圖ひから這ひ出さうとすることがある。それを飼主が、ハツと叱ると、其まゝ引下る。憚ういふ風に

馴らして了へばモウ自由自在でどうでもなる。餘程の虐待でもしない以上は滅多に抵抗するものでない。そこで鉢巻にされたり襷にかけられたりしても平氣であるのだ。

△交尾期と實驗の豫知

何の動物でも交尾期がつくと一般に氣が荒くなるものだが蛇は殊にそれが酷い。その交尾期は春の彼岸夏の土用秋の彼岸とかう三度ある。此の季節には餘程馴れた蛇でも非常に興奮して矢鱈に物を咬みたがるから危険である。これが濟むと俗に疳につくと云つて十日間ほどは全で死んだ者のやうになる。之は病氣ではない。人間でいつたらまア産褥のやうなものだ。それから二三日すると例の殻を脱ぐ。さうするとモウ壯健になつて鱗から眼の色まで非常に美しくな

る。

蛇は寒暖の度や晴雨の様などをよく前知して晴雨計の代りになることである。晴天の時は元氣よく地上に跳ね廻つてゐるが雨を催して來ると屹と木の枝のやうな高い所へ上りたがる。暴風雨の前日には澤山の蛇がオチャ／＼繩を丸めたやうに重り合つて食物を喰はない。山國なぞへ行くと洪水の前兆として無数の蛇が大木の梢へ上ると言ふが之は迷信や俗説ではない。實際蛇は下手な寒暖計や晴雨計よりも餘程確かだとの事である。

△蛇の飼育法

山野に棲む蛇は蟲類、小禽類をはじめ土鼠、鼯のやうな物を食物とするが然し商賣に飼つておく蛇には矢鱈に惡食をさせない。小さい蛇

なら卵を一日一つ平均五尺以上の奴には三日隔位に鶏肉を三百目ほど與へる。それも寒暖の度によつて加減しないと消化せぬから暑い時五百目の肉をやるものなら寒い時分はその三分の一もやらぬ。殊に興行蛇は身體を弄り廻されるので多少弱つて来る。そんな場合に膝の上に乗せて俯向けに口を開け薄く切つた肉類を咽元まで押込んでやるのだ。

全體蛇は夏の土用中でも寒がる位だから暑い時分でも直接に土の上におかない。藁屑を布いた上へ蘆か毛布のやうな物を敷いてやらないと冷えて育たぬ。小屋飼けをして三間四方位の土の室を作り冬はその中へ暖爐を入れて始終八九十度の温氣を保たせねはならぬ。そして興行師が持廻るには大きな長持に空氣孔を明け底には温かい

物を敷いて冬は湯たんぼを入れてやる。こんなに大切に育てても一年に百頭中二三頭平均は死んで了ふ。實に育てにくいものである。

△孵化期と蛇の相場

さて蛇の産卵期は何時かと云ふに蟻についてから三日目にお産をする。その卵が蛇に孵化する間が一週間同時に這ひ出すけれど未だ眼は見えない。先づ一匹前になつて草原でも這廻るやうになるにはどうしても二月はかゝる。そして卵の數は一腹に百五十乃至二百生むけれど孵化するまでの間にあらし親蛇が食つて了ふから満足に育つのは十二三尾しかない。

それから蛇の賣買相場は五尺以上の見世物向が一頭五圓から十圓

まで八尺より一丈位のもは二十圓より三十圓。すつと大きくなつて一丈五尺餘になると、蛇の質にもよるけれど、ざつと百圓内外もする。次に娛樂的に飼育する小蛇は金蛇が三圓、虹蛇が七圓、鈴蛇が十圓以上二十圓。之は見世物蛇と反對に、小さければ小さい程高くなる。また蝮は一尺物三十錢、二尺物五十錢といふ相場で、此の捌口は主に下谷邊の賣藥屋、黒燒屋に限られてゐる。それで一年に二百圓位の蛇を上手に飼育して居れば、年収入八百圓ほどになる。その内實際を差引いて五百圓位の純益があるさうだ。

八 新派演劇の旅役者

△壯俳の役割と組織

昔は河原乞食と云つて卑しめられた役者も、明治の世に入つてからは、天晴一廉の藝術家と謠はれるやうになつた。けれども現今の俳優で、眞に藝術家らしい人格を有する者は數ふる程しかない。依然として河原乞食根性が抜けず、表面は名題役者など澄ましてゐても、内實は婦人相手の男地獄が多い。殊に田舎廻の壯士俳優と來たら實にだらしないものである。中には多少高等の教育を受けた者が、ないではないが、多くは墮落書生の成れの果で、道樂半分粹だとか、伊達だとか、女に惚れられるとかいふ好奇心から、同氣相求むる連中が集つて一座を組織するのであるが、勿論花の都では打てぬから、田舎廻り専門の役者たることは云ふまでもない。そして何々正劇、正義團など、銘を打つた看板を賣物にするが、一座の組織はさつと左の如きものである。

立役 二名 これは色男殿様と言つたやうな役割で、美男子たることを要する。

二枚目 三名 立役と共通する真面目な役で。立役と二枚目との差は縹緞の良否に依つて分れる。

女形 五名 この内にも立役二枚目と言つたやうな差別があつて奥さん令嬢向とお上小間使下女向との別がわるのだ。

だ。

大敵役 二名 悪形清水貞吉と言つたやうな役割である。

三枚目 四名 書生職工といつたやうな雑役に當るのでまあ一般の補助役である。

片敵役 三名 大敵役の補助をする。

子役 一名 これは夫婦者の子供を當てるがその善悪は一座の見榮に大關係がある。

下廻 四名 これは馬の脚俳優の弟子といつたやうな格で重

に隠れた役に當るのだ。

右の内最も技倆と人望と才のある者が座長になるので中には太夫元を兼ねる者もある。尚ほ俳優以外に一座にはいろいろの人物を要する。即ち狂言方が一人、之は舞臺の準備や幕の明閉をする役で、この拍子木の打方一つで舞臺を活動するのだから最も大切な役柄である。次に後見が一人、之は狂言方の相談相手として出方の指揮、小道具の出入をする者。それから髪結係の床山が一人、浄瑠璃長唄、端唄、三味線、鳴物等の囃方が三人、衣裳方が二人、太夫元腹心の外交員たる頭取が一人。

役者とも全部四十人もあれば田舎廻りとしては先づ大一座の方である。

△新派俳優の収入

旅役者の収入はその顔振と興行主との契約によつて一定せぬが田舎廻りの中の部を標準とすれば座長が一日二圓以上三圓立役二枚目女形大敵役が一圓五十錢より二圓三枚目端敵役が五十錢以上一圓二十錢。其他の子役や下廻は僅に小遣錢を貰ふ位のものである。次に俳優以外の狂言方が一圓後見が七八十錢噓方が一圓位床山が五六十錢といふ所であるが是等は全部賄附である。

それから興行日数は常舞臺のある所で普通一週間だが次の場所の都合で二三日日延をする事がある。元來芝居は水商賣で當れば旨い

代りに當らぬとなつたら慘目なものだから日延の場合には餘程上手にやらぬと大損をする事がある。普通乗込の際には片向と稱してその旅費は受元(興行主)が支辨する。夫で四十人位の座になると一興行を七日とすれば三四百圓取らなければ太夫元の收支は償はぬ。又太夫元と受元と全収入の歩合で定める場合もあるが之は四歩六歩とか、五歩五歩とか頭取の外交手腕と一座の信用とによつて高下が定まるのだ。そして客から貰つた祝儀は指名された分は指名主に無指名の物は太夫元と興行主とで折半する。その金高は田舎の事だから二三十錢から一圓位が頂上である。

△旅役者の日常生活

いよく一座が乗込むとなると必ず町廻りの顔見世をするがその

費用が受元持太夫持歩合等契約次第である。之が却々威勢の好いもので、この顔見世は人氣の如何に關係する。町廻りから小屋に歸ると、三番叟と稱して酒宴が開かれる。白木の三寶にお銚子を載せ、乾魚、玄米、鹽などを盛つたのが正面に飾られて、受元、太夫、元座長といふ順に車座になつて縁喜を祝ふのだ。

税金は俳優税と興行税と取られるが、俳優税は太夫元の負擔、興行税は大抵折半である。賄ひはすべて受元持であるが、一日二十五錢位の見當だから至つてお粗末なものである。

旅役者の日常生活は朝十時頃に起きて、食後その晩に出す藏題の稽古をするのであるが、それとて立廻りや身振りをするのではない。單に其日の役割を定めて、役々に爲すべき行事を示すにすぎぬのだ。そ

れが濟むと散歩に出る者もあれば、小屋に残つて丁半に耽るものもある。午後五時頃に午飯を食べて仕度に懸り、六時乃至七時から幕があく。大抵段物を七幕位出した後に、喜劇を一場加へる事になつてゐる。それから芝居が閉ねると、夜食を食へに出かけるのだが、此間の二三時間が彼等にとつての歡樂境である。元々男藝者の格であるから、土地の藝妓に噪がれて、買はれるのが唯一の樂みであるらしい。中には随分残酷なことをして金を捲上げるものもあるが、普通は女の方から逆上て來て裸になるのが多いやうだ。當り役になると引張風の有様で、ヤイノノをきめられのがある。そして旅役者の最も當り時は秋の九月、田舎の祭禮のある頃で、隨つて収入の多いのも此の季節である。

九 パン屋の職人

△小僧時代の修業

一口にパン屋の職人と云ても、一人前になるには却々骨が折れる。どうしても十三四の小僧時代から、五六年の間年期を入れて叩き上げねばならぬ。その代り自分で満足に、どんなパンでも焼けるやうになれば、渡り職人として菓子屋に雇はれても、口任せで一ヶ月七八圓は貰へるし、又主人から聊かの資本と原料を卸して貰つて店を出せば、獨立に商賣が出来て三割以上も儲かるから、數年間辛抱をすれば屹と成功疑ひなしだ。そこで先づ小學校の義務年限を終へたら工場のあるパン屋へ小僧に住込むとする。

朝は四時頃に起きて工場に火を熾して、パン焼竈に火を焚付ける。そして食後職人の工場へ入つて来るのを待つて、その仕事を見習ふのである。最初は餡パンのやうな平凡な包み物に取掛る。職人の手際よく拵へる所を見ながら、竹箆を持つて餡をつめるのだが、これがなかなか半年やそこいらでは旨く出来るものでない。餡が皮の外へハミ出したり形が變になつたりして思ふやうに行かぬ。然し一年位やつてゐる内に段々上手になつて、どうにか恣うにか一人前に包み物が出来来るやうになる。此の餡パンが仕上つて来ると、今度はそれより稍や六ヶ敷い束髪捻パンなど云ふ捻くれた形の物に着手する。これが又一種の呼吸もので、馴れた職人の拵へたのと、馴れない職人の造へたのとでは、種も分量も同じでありながら、食べて見ると風味がすツ

と異ふ。此練習が又一年位かゝる。それが満足に出来るやうになると、更に開化物と稱する丸形葉形の桃山に似た焼判を捺したパンの製造に取りかゝる。その丸形や葉形に包みあげるのは左程骨も折れぬが、さてそれに焼判を押すのが騒ぎなのだ。勿論判には手粉をつけて押すのであるが、馴れぬ中は其焼判へ種が一緒に釣上げられて来る。それを釣上げまいとして、手粉を餘計につけて押すと、今度は玉子を引いて、焼き上つたのを見ると、光澤がなくてトテも賣物には出せなくなる。

△一人前になるまで

又葉形は其形が乾柿のやうな格好をしてゐるので判の押し方によつていろいろ變なものになる。で此練習も亦た容易なものではない。

然し之も無事に済んで工場で一年二年と暮す中には、始めてパン屋職人の奥儀とも云ふべき種製造に着手するのであるが、この種製造は一種の酒を製造すると同じやうなものである。先づ大樽にパン粉を入れ、次に酒種を入れ、砂糖湯を入れ、夏は夏、冬は冬のやうに温度を計つて攪廻す。それから蓋をして醗酵するのを待つ。之が非常に責任の重い仕事で、悪くすると温度や氣候の加減で十貫目、二十貫目といふ材料を腐らせて了ふ事がある。

尙ほ進んで元種の製法に入るのだが、此の製造法は職人から説明を聞いただけでは出来るものでない。皆な自分でさまざまと苦心の結果、多年の経験で漸く會得するのである。それをすつかり覚え込むまでには、幾多の失策と損害との苦い経験を嘗めねばならぬ。

さて之も無事に仕上るやうになると、同時に竈前に出世して、最後に乾き物に手を出すやうになる。さうなるとモウ一人前の押しも押されもせぬパン屋職人と立てられるのだが、自分の製へた種を以て、總てのパンを焼き得るやうになるまでには、どうしても四五年の修業を要するのだ。現今東京で此のパン屋職人で立派の腕前を持つた者は百人位しかないさうだ。

十 資本入らずの鳥餌拾ひ

△廢物利用の金儲

何か商賣を始めたいにも、資本がなくて困るなど云つて、生活難に泣いてゐる輩は、よしや資本があつたにせよ、儲ける事を知らぬ意氣地な

しである。見給へ、東京にはいくらでも素手で儲かる商賣が轉がつてゐる。而も諸君の脚下に金が落ちてゐるのだ。それは何である？と……まアさう急がずに聞き給へ。すべて金儲けは人の氣附かぬ所へ眼をつけねばならぬ。穢いとか下品だとか云つてゐては立身出世は出来ない。茲にこつそり傳授致さうといふ金儲けは、矢張り人の穢ながる商賣の一つ、下水や流元から落ちて来る米麥の類を拾ひ取つて、鳥の餌に賣るのである。それとて何も泥棒や乞食をするのではない。寧ろ立派な廢物利用商である。少しも耻づる所はない。

現に中澁谷の薪屋で、商賣の傍ら此の鳥の餌拾ひをやつて、二三年間に數百圓の金を貯蓄し、その金で古長屋を建て、今日では小さいながら、「家主の旦那様」と呼ばれるやうになつたとか。何と廢物利用の兼

業も馬鹿に出来ぬものではないか。

△鳥餌拾ひの方法

さて其方法はと云へば石油の空罐、天秤柄の長い金網、これだけを資本に落ちてゐる金を掬ひ取るのである。然し之には時刻がある。朝晝、晩の食事時。場所は兵營か學校の寄宿舎、又は大工場の下水等から、その溝尻へ流れ落ちて来る米、麥飯を、時刻を外さずやつて行つて、彼ら金網で杓り取るの、誰にも出来ぬ藝當である。學校や工場の寄宿舎も目指す敵であるが、何事も大まかな兵營と來たら實に旨いものだ。僅か三十分か一時間の間に、一荷に擔つて天秤棒の折れるほど拾ふのは何の造作もないとのこと。

かうして拾ひ集めた米と飯を、直ちに養雞業者へ持込むのである。

すると養雞屋では、その品の良否を鑑別して値段をきめる。例へば砂が混つてゐるとか、又は塵芥が多いとかすると、其割で値が安くなる。然し元々金網で掬ひ上げるのだから、さう大した混合物はない筈だけれど、偶には人並に働く事を嫌ふ奴が骨惜みをして、雑物を篩ひ出さぬことがある。そんなのは別として、少し丁寧に揺ぶり出すと大變に異つて来る。

△片手間で一圓以上

値段は一升二錢内外で、二石罐に二杯拾へば二斗だから四十錢、それが一日に三度、確かに一圓以上になる。而も一錢の元手が入るでもなければ、時間とてもホンの一寸した勞力である。單にこればかりでなく、時によると意外の儲けものがあるさうだ。

と云ふのは個人の家ではそんな事はないが、此の大きな若い男手によつて炊事をされる兵營などでは萬事大ざっぱであるから、澤庵の一本物とか、鮭の頭などがそのまゝドット流し出される。それを家へ歸つてからよく洗つて總菜にしたり、又は貧民窟へ持つて行つて賣るので、之は彼等の意外の所得とするところである。此の鳥餌拾ひは時刻が一定してゐるから、他の商賣を営みながら兼業としてやることが出来る。澁谷青山界隈では半病人や、老人などが隠居仕事にして、小遣取をしてゐるとのことである。何にしても旨い商賣だ。

十一 釣魚師相手の餌商賣

△ 蛭捕りが一番流行

前の鳥の餌拾ひと並んで元手いらすの稼業は釣魚師相手の魚餌取りである。以前は魚の餌としてゴカイ糸目、蚯蚓などが用ひられたが、この二三年來是等の餌がすっかり廢つて、今では蛭の全盛時代となつた。この蛭を用ひるのは誰が発見した事かは知らぬが、釣魚師にしてゴカイや蚯蚓を餌にするのは既に時世後れと云はれる位に、蛭餌が流行し出した。と云ふのは他の餌よりも魚が蛭を好くものと見えて、之が一番よく釣れる。随つて此の餌の賣行がよいところからゴカイや糸目取が漸次蛭捕に化けるやうになつた。

ゴカイや糸目を捕るには干潮の時例の熊手で泥溝を搔廻して、一匹二匹と拾ふのであるが、之は干潮の時だけしか捕れぬので、殆んど日當にもあたらぬことがある。ところが蛭は本所深川邊の横川や、仙臺堀、

郡部境の小川に澤山にゐる。そして捕捉法も極めて容易である。その方法は鐵板か瓦屑を麻糸にくゝるつけて川の中へ一晩も投げ込んでおく。すると翌朝その糸を引上げて見ると、瓦や鐵の裏へ三四十疋の蛭が吸附してゐる。それを取るのと、一つは小川の瀬戸片や板屑などを引起して七八疋位宛は取る。都合一日百五十位の蛭を取るのには左までの難事ではない。

△一日に二圓弱の収入

斯うして捕つた蛭は魚の餌にもなるがその他の用途も少くなく。一寸以下の小さいのはすべて魚餌屋へ出す、これは一尾平均五厘位だが、百尾あつて五十錢。外に一寸以上の大蛭は醫療用として藥舖及び病院へ賣ると、一疋一錢五厘以上二錢になる、これが五十尾一疋一錢五

厘と見なして七十五錢、一日一圓七十五錢の収入になる。

蛭の餌が釣魚に好いとは云ひ條然しゴカイや糸目でなければならぬものもあるから、多少此の需要者がある。蛭が賣出した爲に、一時は非常に下落したけれど、その反動とでも云ふのか近頃は少しく値が出て来た。このゴカイや糸目は元は深川附近の横川にも居たのだが、近年は工場から流される油の爲に居なくなつて、皆な大川筋へ出て了つたから、段々捕場所も狭められた。そして之は一日精を出して稼いで高々五六十錢にしかならぬので、今では男子の兼業か若くは婦人の内職といふ姿になつて了つたが、然し船頭の妻などの内職としては割合に旨い商賣である。

△半年に一年の生活費

ゴカイや糸目を捕るより、蛭を捕るのが樂で、良い日當にあたるばかりでなく、問屋でも蛭を歓迎するのである。それはゴカイや糸目は、圍つておく中に死ぬのが多くて持ちが悪いから問屋でも、少し位儲けたのでは割が悪いと、コボしてゐる。之に反して、蛭は圍ひやうがよければ、いつまでも生きてゐるから、自然蛭の方を喜ぶのである。

その蛭にも良いのと悪いのと二種あつて、縞のと蚯蚓色をしたのがあるが、魚餌や醫療に賣れるのは、縞色をした縞の方である。之は捕つて問屋へ持つて行つた時に、悪いのは嚴重に除ねられる。

東京では此の餌屋の問屋が七八軒ほどあるが、何れも餘り繁昌とまでは行かない。却つて魚餌取の方が樂のやうである。唯だこれは季節があつて、十一月か三月頃までが季節である。夏分は他の獵と同じ

く駄目で、寒くなつてからの稼業であるが、旨くやれば季節半年位の間に一年の生活費は出るだらうと思ふ。

十二 竹屋と竹の皮屋

△竹の種類と價格

(6) 厚皮の竹と屋竹

「竹屋、竹や」と市内を呼ぶ。その竹にはいろいろの種類がある。東京附近で主に捌かれるのは、眞竹、孟宗、紫竹、八竹、四方竹、内竹、業平竹、小町竹、鋪竹、煤竹、矢竹、布袋竹、寒竹等であるが、此内最も用途の廣いのは眞竹である。先づ傘の骨籠、細工物、干棹、垣根、桶の箍、門松等に用ひられる。價格は時の相場で一定せぬが、平均大(尺五寸丸)一本一圓四五十錢、小(五六分丸)三四錢といふ所だ。

孟宗は大は二尺丸小と雖も尺丸を下らない。筍として珍重される外に、撃劔の胴花活茶盆其他いろ／＼の細工物に用ひられる。大は一本一圓二三十錢から小は三十錢前後。八竹は尺八として用ひられる外に、物干棹ともなれば國旗竿ともなる。大は一寸二分丸位から少は五六分丸、價格は大十錢小三錢位。次に紫竹も此の八竹と略ぼ同様である。それから八方竹と内竹とは二分丸から一寸丸位の細い物で、大きなのは釣瓶棹、小さいのは風骨團扇の骨などに用ひられ、一本五六厘から十錢止り。業平竹と小町竹とは前者が女竹で後者が男竹であるなどは其名と反對だから妙だ。業平竹は太いので二錢から小さいのは五厘位の細物である。小町竹は太いので一寸二三錢から七八錢まで。

鏑竹之は眞竹の立枯になつたのを謂ふので、上等物は床柱となり、其他は細工物に使はれるが、値段は一定せぬ。然し竹の中のお職として珍重されてゐる。煤竹之も眞竹から出来る。田舎の茅葺屋根の天井裏にあつて百年二百年と自然に煤けて、古いほど値が高い。用途は濫い床の落とし垣にするのを第一とし、次に茶棚籠花活其他の細工物に用ひられる。極く太いので二圓細いのは十錢内外からある。矢竹之は弓の矢にするので質の良いので一錢五厘並物は二錢位。それから布袋竹は釣棹専用で、一本三錢から十錢まで。又寒竹は東京附近に澤山ある竹だが節が脆くて用途が狭く、一本四五錢といふ所である。

△竹屋の儲けと符牒

東京で竹を賣買する大問屋は、俗に竹河岸と稱する京橋炭町に五軒あるだけだが、小賣商は百軒以上ある。それを仕入れて「竹やーく」と賣歩くのは二三百人もあらう。口銭は三割から四割、一日根よく廻れば三圓以上賣れるとのとだから、三割と見做して先づ一圓の純益。之は少し竹の鑑別さへつけば誰にでも出来るから、樂な商賣だ。すべて何の職業でも同業者間に符牒といふものがあるが、此の竹屋仲間でも一から九までの合言葉が用ひられてゐる。

本(一)口(二)ソ(四)レ(五)タ(六)ヨ(七)山(八)キ(九)等である。例へば一圓五十銭は「本レ三圓十銭は「口本」といふ類である。

△竹の皮の用途と賣行

次に竹の皮は用途も販路も頗る廣い。九州邊から南部地方を輸送

して、履物の表に製されるのだけでも、非常な額である。其他草履、笠等に使用される。東京で多く用ひるのは牛肉屋、菓子屋、漬物屋、酒屋、味噌屋、煮豆屋、天麩羅屋、鮓屋、魚屋、鹽物屋、鳥屋、料理店等である。こんなに用途が廣いから、その消費高も驚くべきものである。東京市中だけで一日に費される高は、一段を四十貫として、二十段使用するさうだから、八百貫の包皮が毎日芥溜に棄てられる勘定である。行商に出る漬物屋は、菓子、味噌、牛肉等を包んだ竹の皮を得意先へ頼んで貰ひ受け、それを洗つて二度の勤めをさせる者もあるさうだが、それは極めて僅少で、十中の八九は棄てられて了ふのだ。

何商賣に拘はらず、一年三百六十五日同じやうに賣れるものではないが、殊に竹の皮屋は夏は一般に閑散である。といふのは肝腎の牛肉

屋と菓子屋が毎年五月下旬から九月頃まで賣行が減少するので竹の皮の需要が少くなるからだ。尤も七月の中元には進物用の砂糖が多く賣れる同時に中の包みにする竹の皮も動く。が先づ十月から翌年四月頃までが賣行のよい時期としてある。殊に花見時は方々に人出があるから包み皮の需用も多く、一年中の書入時である。

△竹の皮屋の利益

竹の皮屋には同業組合の設けがなく、何れも獨立自營である。市内の大問屋としては京橋八丁堀の中村宇之助日本橋米澤町田島達三等をはじめ三十七八軒の同業者がある。そこで竹の皮の相場はその大ききさによつて相違がある。此の寸を別つのが却々手数のかゝるもので、一駄の荷が問屋へ入ると、それを尺箱と云つて寸を量る箱にあて、

大飛並飛大皮中皮合中、小皮小々と七段に區別するのだ。更に又幅によつて之を十三四種に細別し、丈も幅も三分と違はぬまでに整理をする。恁くして仕上げた物が、大飛で、一貫目八九十錢、大皮は五六十錢以下十錢落位で取引されるのである。それを買つて小賣商が市内の菓子屋、肉屋、味噌屋等に卸すのであるが、口錢は普通二割五分としてあるから、平均五十錢の物を十貫目賣るとすれば、五圓に對する一圓二十五錢の利益である。是等類の多くない商賣だから、顔さへ賣れたら相當に儲かるであらう。

十三 海を相手の漁夫生活

△漁の種類と其組織

變つた稼業も澤山あるが、一つ間違へば生命懸けの商賣は海を相手
 の漁夫である。之には漁の種類と漁期とがある。六月から十月まで
 鯉船十一月より翌年五六月頃まで揚繰船と繩船五月より八月までコ
 マセ船九月より翌年の四月まで蛤船四季通じてあるのは地引網で
 ある。先づ鯉船の方から云ふと、十二人以上二十人位で組織するので、
 皆なそれ〴〵役割が定つて居る。普通の組合せは親方――船頭一人、
 棹張一人、中櫓一人、前櫓一人、餌まき一人、船方十人、都合十五人で出か
 るので、朝の船出は早いほど良いとしてある。其譯は鯉釣の手初めと
 して、先づコマセと云ふ餌を撒いて鯉を捕るので、此の鯉が鯉の餌にな
 るのだ。若し船出が遅れて肝腎の鯉が捕れなければ鯉を釣る事が出
 來ない。だから他の船より早く出て、早く餌をとつて早く鯉を釣つて

早く歸つて高價に賣らうといふ段取になるのだ。
 此の鯉船は普通朝出かけて夕方歸ることになつてゐるが、時による
 と五十里も七十里も沖へ出かけて薩張り捕れない事がある。釣る時
 間は僅に三十分か一時間だが、附く時には無暗とついで、一日百五十圓
 位捕れる事がある。

△漁夫と魚の捕方

秋も末になつて鯉が捕れなくなる頃には、それと入れ代つて繩船の
 季節となる。之は鯛鮫鮨を主とする船で、船員は五人乃至八人、唯だ餌
 撒がないだけで、他は大抵鯉船と違はない。釣り方は鮨は鯛を餌とし、
 鯛の餌はゆうと稱するので、どちらも針をつけて釣るのだが、鯛は餌を
 つけずに空針を繩の間へ捻りこんで、それで引かけるのだ。この船は

遠航して三四日も沖に泊るばかりでなく、冬分の暴荒がちの季節だから、一番危険で而も一日二十圓位しか捕れぬ。

次に揚繰船と云ふのは、二艘の船を聯合して鰯類を捕るので、人数は一艘二十人づゝ四十人。二里ほど沖へ出て船頭が網を抛り込むと、二艘の船がそれを曳きながら扇子形に開いて、網の一杯に張切つた頃、再び元の所へ戻つて、網を船の中へ曳上るのだ。網の種類は大鰯、脊黒、中鰯、じやみ等皆なそれ／＼異ふ。大漁の時は一日で五百圓から八百圓近く捕れるが、永く不漁が続くと漁夫は惨目なものである。

△漁夫の収入と賃金

漁夫には親方と船方と云ふのがあつて、親方は船主の地主見たやうなもので、船方は謂はゞ小作人のやうなものだ。そこで船方の収入は

と云へば、鯉船と繩船の方は、別に給金を定めて雇はれるのではない。獲つた魚の賣上高によつて歩割を貰ふ約束である。その割合は親方が五割半、外に船代として一割、船頭が二割、棹張が一割半、其他は一割。親方は船代は船代として取つておきながら、其上に五割半といふ法外の配當を取るのだから、實に慾張つたものだ。而も船方共の無智文盲なのを奇貨として本當の賣上高は話さずに可加減に誤魔化しておく。偶ま船方が賣上帳を見せて呉れと云ふと、「お前達の知つた事でない、良いやうにして分けてやるから黙つて見てゐろ」と云ふ位なのだ。だから見す／＼誤魔化される事が分つてゐても泣き寝入りで、表面上の規定は反古同様になつて了ふ。

さて揚繰船は一職(舊九月十日より翌五月十日までの漁期)一人につ

き、五十圓の給金で雇ふのだが、一期に四十人も船方を要するから却々費用がかかる。賄ひは一切親方持の代りに漁のない時は百姓仕事なり、何なり主人の命令通り働かねばならぬ。尤も朝分れと云つて船の出ない日は、朝飯だけ親方の家で済まして、アトは自宅へ歸るなり、自分の仕事をするなり勝手であるが、その代り主人の物を食ふ譯には行かぬ。そこで船方其の利得は、給金の外に大漁の時には、同心棒と稱して、總賣上高の割を船方全體へ分配されることになつてゐるが之とて前述の如く可加減に當がはれるので、正確なる計算にはならぬ。まア普通船を持たぬ漁夫の収入は、平均一日一圓乃至一圓二三十錢位なもので、放縦な生活さへしなければ割合に樂なものである。

十四 金魚屋と其飼育法

△金魚の相場

金魚も子供の玩具にする小さいものなら、一尾三厘から五厘、一錢二錢、五錢、精々十錢位のものであるが、金鑄と云つて、最上等のものになると、一尾百五十圓、一等が百圓、二等で七十圓、三等五十圓、種にする良魚が七十五圓といふ素晴らしい相場である。それだけ飼育法に骨の折れるもので、一尾七八十圓もする金魚は十萬尾飼つて、一尾出るか出ないかである。そして金魚には番附が出来てゐて、東西の兩大關は何の某と云ふ風に有名なものは數ふるほどしかない。縁日などへ出る金魚屋は夏場だけの商賣で、六七、八三ヶ月の間に一

年中の生活費を儲けるのであるが、然し一年中飼育法に注意して、良種を得るやうに苦心せねばならぬ。之を飼ふには先づ置場、容器、魚、数、水の換へ方、暑寒の手當、餌の附け方等をよく心得てゐねばならぬ。

△金魚の飼養法

置場は日當りと風通しのよい、静くも朝八時頃から午後三時頃まで日の當る所でないと可けない。だから成べく畑地のやうな廣々とした所がよろしい。容器は塗泉水か箱舟がよい。幅三尺、長さ六尺深さ六寸位の容器なら、十年は入れて置かれる。之より大きな容器であつたら、それに準じて深くせねばならぬが、然し餘り深くすると水が温まらないで、金魚の育ちが悪くなるから、どんな廣い所でも一尺以上にしてはならない。そして新しい容器に飼ふには、水を十日間以上入れて

おいて、一旦その水を取換へた後でなくては魚を入れてはならぬ。それから泉水を掃除する際には、青苔を落さないやうに、ざつとしておくことで、餘り綺麗に掃除すると却つて金魚の爲に宜しくない。又決して日に乾かしてはならぬ。魚の隠れ場としては、藻のやうな物を入れておく方がよい。

金魚を飼ふ餌としては、微塵子、子米、蚯蚓等で、其分量は魚が當歲ならば、その頭の大きさほど、二歳以上は頭の半分程を一日の量とする。與る時間は朝の七時から九時までの間がよい。

△金魚の種類と其收入

金魚の種類はオランダ、琉錦、和錦、支那錦等で、是等は價格が安く、販路が廣く、市中へ行商するのは大抵これである。最も高いのは蘭錦と

稱するオランダ種で之は一尾十圓から五十圓位する。支那錦といふのは姿は醜いけれど兩方の眼が揃つて飛出してゐるのが上等で、一尾五十錢位。下等なのは十錢内外でも買へる。金魚は必ずしも大きいのが高いとは限らない。目方百五十目から二百目もある琉錦で七八歳にもなるのが一尾二圓位の相場である。

金魚は採卵から販賣まで滿一ケ年で一段落がつく。以前は随分儲かつたものであるが今は價格が安いので聊か不振であるさうな。そこで金魚を養殖するには三十坪乃至四十坪の溜池を一區劃として之に一萬尾ほどの孵化して間もない金魚を投入する。それが一年の後には半分位しか育たない。けれども景氣の好い時には一坪につき一圓五十錢の純益があるから假に一圓平均として四十坪の池があれば

四十圓儲かる譯である。現今日本で金魚飼育業の最も盛んなのは大和の郡山である。此地方では内地へ供給するばかりでなく海外へも盛んに輸出して年額二三十萬圓に達するとのこと。尤もこれは農家の副業としてやるのださうだ。

十五 人夫募集業

△北海道行募集屋

市中を歩いて見るとよく「北海行人夫募集」又は「足尾銅山工夫募集」などいふ貼紙を見る。この募集屋は毎年北海道から来る四名の元締と東京には二三軒の元締があるばかりだ。そして是等の手で集められた人夫は如何なる方面へ向けられるのかと云ふに北海道で

は鐵道工夫として天鹽線の音威子府附近志文より萬字線を主なるものとし、其他苫小牧附近の灌漑工事修繕事業等である。又足尾行は専ら銅山の工夫。外に青梅線の鐵道工事に雇はれて行く人夫もある。北海道行人夫の雇主は落合組、大倉組、堀内組、橋本組、關組、今村組等であつて、是等の募集屋は、時々合同して募集した人夫をお互に融通し合ふことがある。今之を表で現はすと左の如きものである。

◎元

締

小樽網走町	旭川一係通	◎事	坂井	某
青森市安方町	仙臺市新傳馬町	◎事	盛田	某
下谷萬年町	おけらの親分事	◎事	沼邊	某
下谷區御徒町三丁目	橋本組	◎事	東北合齊藤	某
本所區線町三丁目	旭組	◎事	橋本	某
親募集者	鈴木の直事	◎事	齊藤	某
		◎事	武内	某

◎下募集屋

下谷區車坂町	川口事	矢野	某
同	菊地屋事	藤川	某
下谷橋荷町	鈴木組	小林	某
下谷萬年町	ひげ庄事	川口	某
下谷區入谷町	北陽組事	市川	某
下谷區西町	稻荷組	佐々木	某
淺草區淺草町	こん寅事	佐藤	某
淺草區元ルナパーク裏	今村事	齋藤	某
本所區菜平橋際		中島	某
本所區井戸天神裏門		飯田	某

△募集屋の収入と利益

足尾行の人夫は橋本組、旭組、東北舎の三軒で、青梅線は橋本組、猪苗代は武内組が元締となつて取扱つてゐる。そして人夫の募集期は、北海道行は三月末から七月まで、足尾行は二月より十月まで、猪苗代行は四

月から七月までの四月間である。右の外東京市内で働く人夫を募集してゐる者が各區に二三軒づゝある。之は自分の家へ直接頼みに来る労働者の外に、各所へ人夫引を出して、一人の労働者を連れて来た者へは三十錢位の手數料を拂つて居る。無論それ等の人夫は自宅へ寄宿させて賃金は親方が受取り、食料から屋根代を引去つた残りを本人に渡すのである。そこで募集屋の利益は如何かと云ふに、北海道行人夫の手數料が最も多い。募集屋仲間では手數料のことを「單價」と云ひ、直接に自家へ来た者を〇玉と稱してゐる。此の單價は三月から四月一杯まで、上野驛渡して、一人三圓から三圓五十錢。五六月頃になると、人夫が少くなるから、さうなると一人五圓から六圓の手數料になる。

それで北海道の元締は旭川附近なら一人二十一圓、岩見澤附近なれば十七八圓で受負にて來てゐるのだが、今東京の募集屋の請負價格を示すと、ざつと左の如きものである。

行	先	單價	汽車賃	途中辨當料 護送人費用共	東京滞在 食料及雜費	下募集者へ 拂渡手數料	親負募集 者の利益
北海道行	四、五〇	上野驛渡し			一人四食平均一食七計四八	二、〇〇	貳圓貳錢
足尾行	三、五〇	淺草足一、五六	二十錢		一人三食平均一食七	三、一〇	六〇
青梅行	一、五〇	新宿立	二九	電車賃五錢 外護送費共十錢	同上	三、一〇	四〇
猪苗代行	五、五〇	上野驛二、一四	五十錢	同	同上	三、一〇	八〇

先づこんなものであるが、前記の橋本組、東北舎、武内組、旭組などは自家へ直接に來る〇玉が多いから、それらの汽車賃雜費等を引去つた外は、皆な利益となるのだ。そこで一ヶ年東京から各地へ何人位の人夫

を供給するかと云ふに、北海道へ千八百人、尾尾へ約千人、猪苗代へ四百人、青梅線へ二百人、全部で三千四百五十人位のものである。

△募集屋の内幕

右の募集屋は三月から十月頃までに限られた商賣で、一年中通して人夫の行場がないから、冬分は遊んで食はねばならぬ。ところが水商賣であるだけに、多忙な夏期の間には可なり収入があつても、失費も又随つて多い。殊に人夫引即ちポン引なる者が頗る厄介な奴で、彼等は皆な土方上りの無頼漢だから、ヤレ貰錢を呉れるとか、酒代を出せとか云つてセビる。それを断ると、多忙な時人夫を集めて呉れぬから、奴等を使うには非常に骨が折れる。それで冬期の間は下募集屋は、各所の土木工事や建築を請負つてゐる親方の所へ行つて仕事をする。又

親募集屋は四軒が四軒とも、土木建築請負業だの諸官廳御用達だのと、堂々たる看板を出してゐるけれど、その實請負師でも何でもない。橋本組と武内組は、貸布團と土地家屋などの周旋をして漸く冬季を凌ぎ、東北舎の親分は市内稼ぎの人夫を請負ひ、旭組は小松川の硫酸會社の職工を入れて、來春の季節を待つといふ有様だ。

十六 淺草公園の餌料賣

△鳩の餌を賣る豆屋

世の中に變つた商賣も随分あるが鳩や鯉のお蔭で飯を食つてゐる稼業は、恐らく淺草公園の餌料賣位のものであらう。觀音様の仁王門を潜つて、本堂の方へ向ふ敷石の兩側に、お天氣の好い日は必ず九人の

婆さん爺さん達が、露店を張つて鳩にやる豆や掃寄せの残米を、小さな土器に入れて賣てゐる。そして子供の顔を見い、
「鳩ポツポ鳩ポツポ」など聲色を使ふ。子供は五厘銅貨を投じて「ソラやるぞ」と撒く。すると忽ち鳩が集つて来て豆や残米の御馳走に預かる。寔に以て罪の無い商賣である。

此の豆と米の土器が二杯で五厘であるが、普通の日で三百杯、日曜大祭日にはその倍も賣れるとのこと。假に三百杯としても一圓五十錢の收入、その内原料を五十錢としても、一圓儲かる。老人の隠居仕事としては實に結構な稼業と云はねばならぬ。ところが此の豆賣には昔から株があつて、新規の出店を許さない。九人と定つてゐる。その株を買うには一株時價百圓といふ相場であるから、貧乏人には出來ない。

そこで高利貸が株主となつて、揚錢の中から一日五十錢宛徴收する約束で貸附けるのがある。

此際は株主の方で餌料の豆から残米、屋臺店から大日傘、それに土器まで添へて貸すのだから、愁じ百圓の資本を投じて自ら株主たらんよりは、寧ろ五十錢の揚錢を拂つて、營業した方が割がよいと云つてゐる。然し株主の與へる餌は豆と残米で、一日僅に一升平均であるから、それだけではドウしても足らぬ。そこで三百杯も賣るには、自分で腹を切つて二十錢位原料を補充せねばならぬ。中には餌代は借主持として、一日の揚錢を三十錢位に交渉するものもあるさうだ。

△鯉にやる焼酎屋

此の豆賣婆さんと相對してゐる商賣は六區の池の鯉に與る焼酎賣

である。中の島の橋の際に、大きな籠に焼酎を入れて一連(十個)二銭と記してある。昔は番人も何もなく備付けの錢箱へ、客は正直に錢を投込んで、鯉に釣をやつたものだが、近頃は泥酔の職人や書生などが申談半分無料でやるのと、それに夜分など不良少年や乞食がやつて来て、無断で鯉の身代りをする。釣はいくらあつても堪らぬ。そこで投身者を救ふ池の番人かたぐい一人の老爺が釣を賣るやうになつたのである。

公園の商賣は冬分北風が吹出したら何でも霜枯になるが、殊にこの焼酎屋は不景氣になる。寒い日は人出が少いばかりでなく、肝腎の鯉がいくらか呼んでも浮いて来ないから、餌をやる方でも張合がない。その代り春の彼岸頃から、ポツポツと暖かくなるに随つて景氣がつく。殊

に縁日や物日になると、一日百連位の釣が奇麗に賣れて了ふ。百連賣れば二圓の収入だが、其内原料の釣代が一圓残る純益は一圓である。此の焼酎屋には株金だの地代だのが無い代りに池の番人即ち投身者を救はねばならぬ責任があるのだ。夜中ソラ投身だと見ると、飛込んで引上げるのだが、冬の寒い晩など實に堪らぬさうである。此の釣屋の番人が出来た故か、近年は公園の池に飛込む者が殆んど無くなつたさうである。何方かと云へば、これよりも鳩の豆賣の方が樂で、収入も多いとのことだ。

十七 東京の塵芥掃除業

△驚くべき塵芥の分量

「塵も積つて山となる」とはよく云うた諺で、東京は日本一の大都
 會だけに家々の臺所から掃き出される塵芥の量は、實に大したもの
 ある。一ケ年に市内四十萬戸から搬び出される總量は、一車七十貫か
 ら詰るといふ芥車に、ギツシリ積んで九十萬車あると聞いては驚かざ
 るを得ない。この夥しい塵芥の處分としては七割まで肥料になる。
 其他湯屋の燃料もあれば、古鐘、古釘、古火箸のやうな金物類も拾ひ出さ
 れる。之は各區の掃除請負人が最寄の河岸へ運び出すと、そこに千葉
 の肥料會社の船が待構へて、肥料分だけを選分けて搬んで行つて
 了ふ。其内燃料や古金物類が一割残る二割が全くの廢物として燒棄
 てられるのだ。その肥料代、燃料代、古金物代はどうなるかと云へば、各
 區の衛生係と掃除請負人とが結托して任意に處分するとのことだ。

尤も古鐘、古火箸の如き金物類が、掃除人夫の餘徳であることは公然の
 秘密で、一ケ月二三圓になるさうだ。湯屋燃料は同じく請負人の餘徳
 として、之が一ケ月少い區で五圓多い區になると二三十圓にも當る。
 それから肥料は多い區で六七十圓、少い區でも十圓位は出る。

△請負人と掃除人夫

そこで掃除請負人は、東京市から人川一人に對して、四十五錢平均の
 日給で受合つてゐるのだが、本人に直接渡す分は聊かなものである。
 それは運搬用の箱車、人夫の法被、各區の塵芥取扱場から、深川の燒却
 場までの棄芥運搬の船賃などを請負額の中で負擔しなければならぬ
 ので、部下の人夫に市から割當てられた日當四十五錢、其儘與へる事は
 出来ぬ。多い區でも飯を食はした外に三圓五十錢、少い區でも一ケ月

二圓位のものである。そして手當の多いのは四谷、赤坂、麴町のやうな山の手で、芝區の如きは三圓、少いのは神田、日本橋、京橋の如き下町の繁華な場所である。

然るに下町の手當の少ない區は、人夫が永續して成績もよいが、山の手は手當が良く勤績者が少い。之れは甚だ奇現象のやうだが、大に理窟がある。一體市の塵芥取扱所は下町は大川筋を第一として、神田川筋、古川筋、其他各區、各川筋、外濠などの船便が要所々々に設けられてある。日本橋、京橋、神田、芝、浅草、本所、深川は區内に少くとも一ヶ所の船便と塵芥取扱所のない所はない。之に反して麴町、四谷、赤坂、牛込の如きは區内に一ヶ所もそれが無い。けれども掃除人夫は如何に遠くとも一切その取扱所まで運搬せねばならぬ。一人一日、一車七十

貫の塵芥を二車半から三車位運搬せねばならぬ。

△掃除人夫と特別収入

それに市の方では絶えず掃除巡視を派出して各區の成績を調査し、成績の好い區はいつまでも抛つておくが、不成績の區は翌年度から請負人の變更を命ずる。そこで人夫の勞力の多い山の手の請負人は、他區よりも比較的多額の手當を出してゐるに拘はらず、却つて成績がよくない青山の練兵場へ棄てたとか、濠へ投込んだなど云ふのは、いつもこの方面である。それも一つは人夫共が骨が折れる上に、山の手の塵芥は下町と比べると中流以上の家庭が多いので棄てる分量が多く餘徳が少い。それが山の手の下町の人夫の割のよい所である。

下町は人家が稠密なので廻るのに骨が折れず、坂路がなく取扱

場が近い。随つて運搬に樂で、各市場だの料理店、飲食店、青物、魚屋などが多く、且つ人家が込合つてゐるから、塵芥溜はいつも一杯になつて間斷なく、人夫に廻つて貰はなければ、夏分など臭くて堪らぬといふ有様だ。そこで下町方面では所謂商人氣質を發揮して成べく溜らせぬやうに溜らせぬやうにと心懸けて、人夫に多少の心づけをするのである。殊に淺草邊の飲食店では、殆んどそれが習慣のやうになつてゐる。彼等の話によると、一戸一ヶ月二十錢位は呉れるさうで、之が一區に二戸あるとすれば、四圓の別収入がある。ところが山の手は官吏や勤人が多いから、こんな心附けなどをせず、塵芥が溜つても掃除屋が來ないと、直ぐに區役所へ怒鳴り込んで、權柄づくで取らせると云ふ風だから、人夫に少しも餘徳はない。

尤も之は公然の秘密で、袖の下といつたところで、今もいふ通り一ヶ月二十錢か精々三十錢である。だから其筋でも知つてはゐながら、強ひて穿鑿立はせぬ。又出す方でも、元戸毎に金を拂つた時代に、自宅の塵芥は多いからと、特別の心づけをした頃からの習慣で、何とも思つて居ないのだ。ところが人夫にとつては、之が唯一の目的で、請負人の手當や古金物などには眼をくれない。夫もその筈であらう。持場によつては、一人一ヶ月二十四五圓になつて、請負人の方が却つて此の分前を貰うところから、頻りに人夫の機嫌を取つて、何方が主人だか雇人だか判らぬ位であるさうな。そこで彼等の内情を聞いて見ると、請負人の方は、人夫の頭を一日十錢づゝ刎ねて、十人あれば一圓、その外に湯屋の燃料、肥料の分前が一ヶ月十圓内外。又人夫の方は、表面の収入とし

ては一日十錢位であるが、今云ふやうな特別の収入があるので、食料は別として、一ヶ月八九圓は入るとのことである。

十八 東京の黄金はらひ

△得意先は花柳界

オ●イ●屋と云へば鼻摘みだが黄金拂ひといへば何となく美しさうに聞える。然し之は同じ便所をいぢるにしても、普通のオ●イ●屋と全然性質を異にして、主に人の落した物を拾ひ出す、餘り類のない商賣である。その扮装を見るに、紺の股引脚絆がけに草鞋をはき、右手に長さ二尺餘りの金網張りの又手を携へ、左の腋下には消毒箱と記せる箱を肩から吊下げて、一見區役所の衛生係かと思はれるやうな風をしてゐる。

る。そして彼等の得意先は吉原、洲崎、品川、新宿等の遊廓をはじめ、新橋、烏森、濱町、築地邊の料理屋や待合である。中に特約あるものは、月何回と定めて壺渡ひに出向くもあり、又臨時お客が大酔をして、物品を取落した時、急使によつて呼寄せられる場合もある。その渡ひ出した物品については、別に報酬の割合などは定めてないが、偶に三四百圓もする金時計などを拾ひ上げた時は、その客の氣心によつて十圓乃至十五圓位呉れる者もあると云ふ。そこで便所への落し物といへば、大抵金銀の時計、懐中物、指環、簪、紙包みの銀貨及び紙幣等であるが、一番多いのは銀貨入、時計、紙包みの銀貨などであるさうな。彼等の仲間ではこの商賣を黄金拂ひと呼んでゐるが、或は黄金ざらひの訛つたのであらう。例のオ●イ●屋は之は壺荒しと稱して居る。

△資本不用の珍職業

此の商賣を新規に開業すればとて警察署へ届ける必要もなければ、鑑札一枚受けるでなし、又親分などへ附届けをする事もない。それに資本と云つたところで前記の金網に消毒箱だけだから、屑拾ひをするよりも手軽に誰でも出来る商賣だ。然し彼等が定得意を作つて、公然黄金拂ひをやるまでの辛苦は却々一通りでないさうだ。得意以外の待合や料理屋の裏口へ廻り、無断で掃除口を開いて、怒鳴りつけられる事なども珍らしくない。そんな時は例の消毒箱を示して、區役所の衛生係から来たと誤魔化して逃出すとのことだ。

この商賣の初めて出来たのは、最近七八年前で、現今では東京市内に七人の同業者があつて、其内首領株は三人。吉原から浅草公園界限を

占領してゐるのが、入谷の土族松洲崎遊廓から築地方面を繩張りにしてゐるのが、本所業平町の伯樂の岩松、又日本橋から新橋、烏森附近を得意場としてゐるのが、芝新網の天麩羅三次と云ふのだ。是等の首領は何れも數十軒の定得意を持つてゐて、二三人の部下を使つて居る。さうして彼等の収入は、平均一ケ日三十圓内外だとのこと。この外特約の定得意を持たぬ黄金拂ひは、已むを得ず、偽衛生係りと化込んで、手當り次第に仕事をするのであるが、収入は少いとのことだ。

△便所の中に金時計

或一夜、京橋木挽町で有名の旅館に賊が入つた。當時滞在の中、大阪俳優、中村某の室を襲つて、高價の金時計と、女將の時計とを盗み去つたが、早く気が附いたので、旅館中大騒ぎとなつた爲に、賊は狼狽して逃路

を失ひ、遂に雪隠に潜んで、生命から一掃除口から遁げ延びた。この時旅館の番頭は直ちに前記の天獄羅三次を呼んで、壺浚ひを命じた。三次は即座に黄金拂ひを試みたところが、果せる哉、男持の金時計が一個だけ現はれた。番頭は男物だけあつて女持のない筈はない。どうも訝しい、必ず男持と一緒にある筈だ、三次、貴様手品を使つたな、そんな不正な事をするやと警察へ突出すと脅喝した。三次は飽までも一個しか無かつた事を主張する。番頭と若者とは非常に立腹して、三次を袋叩きにして追歸した。

此の話を聞いた三次の友達は憤然と激昂して、よし我々も江戸ッ子だ、三次の爲に雪冤をしてやらうと一決し、三次の同業者に命じて、更に旅館の便所を探らしめ、再び入念に黄金拂ひをやつたところが、苦心の

功空しからずして、遂に一個の女持時計を浚ひ出した。茲に於て三次の友人等は、公然旅館の番頭に嚴談を試み、散々前日の亂暴を謝罪せしめた上に、その女持時計を買取らせ、凱歌を奏して引揚たとのことだ。兎に角この黄金拂ひは類の少い商賣だけに、時によると意外の儲けにつきあたることがあるさうだ。

十九 犬猫相手の家畜病院

△五頭で百五十圓

近頃メツキ殖えた商賣は、市内の家畜病院である。これは犬や猫、雞などの外に、牛でも馬でも入院させねばならぬ譯であるが、牛や馬を收容するには、広い場所を取るから、獸醫學校などを除くの外、普通の

家畜病院ではそれ等の設備がしてない。大抵は犬と猫とが第一のお得意である。そしてどんな小さな家畜病院でも犬猫一頭につき最下等一圓五十錢普通は一圓の入院料を徴収する。それより以上は客次第で絞られるだけ高く取る。而も患者が人間でないだけに醫師が少し位虐待しても飼主に苦痛を訴へる事はない。又之を收容する檻は、十や二十なら左のみ広い場所でもなくても出来る。犬の如きは比較的大食なものであるが、病氣の上に運動をさせぬから幾許も食はない。食はせたとところで麥飯が主だから費用は一日十錢ともかゝらぬ。薬品の如きも勿論高價な物は用ひず極めて廉價の粗製品である。それ故入院料は殆んど丸儲けと云つてもよい位で、平均五頭の入院者があれば、月収少なくとも百五十圓に上つて、相當な生活が出来る。その

故か近年追々此の開業者が増加して市内のみで七八十軒郡部を合せると百軒にもなるさうだ。然し餘程廣告が上手で客扱ひに抜目がなく、上中流社會をお得意にしてゐる獸醫でなくては豫想程の儲けはない。相當の地盤が出来て、中流以上の生活をしてゐるのは、此中で四五軒しかあるまい。

△家畜病院長の魂膽

此の四五軒の病院も、大抵競馬の全盛時代にウンと儲けて、地盤を固めたものである。家畜病院長は何れも獸醫だから馬の治療もする。競馬の盛んな時分に、當時名馬の持主であつた富豪連に巧く取入り、馬付きとなつて競馬場に入する頃は、過分の手當を貰つた外に、その馬が勝つたとなると、懸賞金のお裾分けといふ意味で、少なからぬ包み金を

貰つたものだ。その上之が手蔓となつて馬の外に、それからそれへと紹介して貰つて、名家の臘犬などを手がけるやうになる。慙うして地盤を作つたものが、多いのだが、さて之を作るまでの魂膽は容易なものでない。某富豪の邸では、馬や犬が病氣に罹ると、一回の往診料として馬が三十圓、犬が二十圓といふ定めであつたが、抜目のない或院長先生、此の往診料の半分は係りの者へ鼻薬に差出した。で係りの人々も小使錢に不自由すると、馬が病氣だ、それ犬が患つたと云つては、早速先生の來診を乞ふて、ピンシヤンして居るものを診察させたといふ奇談さへある。だから旨く上流の家庭に喰入れば、ウンと儲かる商賣だ。

二十 横濱の海上人夫

△裸一貫の沖商賣

大正三年度の統計によると、我が輸出入總額約十二億圓の内、四億七千萬圓まで、横濱一港で引受けてゐる。此の一點からしても、都市膨脹の程度が推定せられるやうに、東洋最大の貿易港たる新嘉坡に比しても、僅に六千萬圓の差異を有するにすぎない。その貿易品を扱ふ船舶の出來について、横濱には是非無くてはならぬ労働團が一つある。それは例の沖人足なるもので、之は東京其他の都市に見るやうな各種の労働者とは、全然その種類を異にして、毎日出帆したり、入港したりする多くの汽船を相手に、海上で労働する人夫である。そして此の海上勞

働者の繁忙如何がやがて、横濱否な日本の貿易の盛衰を示す事になるのだ。一口に沖人夫と云つても、仕事はいろ／＼に區別される。例へば汽船の掃除人夫や、カン／＼蟲や、ガンガラ曳きや、是等は別に専門的の技術を要するのでない。文字通りの裸一貫で肩と腕と足とで働けばよいのだ。そして之が最も多数で、少くも一萬人はある。仕事は既に海上労働といふ特殊のものであるだけに、賃金も一日一圓以下の者は先づ無い。少し手腕節の強い者は日給二圓位になる。

△他に見られぬ特色

彼等の生活状態から云ふと、俗に埋立地と稱する壽町管内の一區劃に、彼等の合同寄宿舎たる沖人夫部屋が六十四棟ある。其大なるは一戸三百人以上、小さいのでも五六十人容れてゐる。そして此の若者

等を巧みに驅使操縦する爲に、必ず部屋毎に一人の頭分があつて、恰も軍隊的組織になつてゐる。即ち小隊中隊に該當するやうな幾組かト集つて聯隊の如くなつて居る。その聯隊長たる親分株は如何なる人物なるかと云ふに、何れも元は裸一貫から仕上げた苦勞人である。例へば開港當時の親分としては、鈴村要造の如き奇傑があつた。一代に巨萬の富を作つて、一代に蕩盡したほどの快男子で、故陸奥伯や、伊藤公なども、放浪時代に此男から救はれた珍談も残つてゐる。この鈴村の屋號をそのまゝ承継いで、現今一方の總大將は山本繁次郎といふ人である。之が部下に大隊長、中隊長などが二十餘名もあつて、一萬有餘の荒くれ男を叱咤支配してゐるのだ。

右の親分株の間には、嚴重なる規約が結ばれてあつて、甲の組合が乙

の組合から人夫の誘拐するやうな事は絶対に禁せられてある。その代り仕事の無い場合には、足留料を仕拂ふとか、飯代を前貸するとか、労働中怪我をした者は病院へ入れてやるとか、死んだ時は葬式を出してやるとか、すべて恠ういふ制度が一定の不文律となつて行はれて居る。従つて單に使用人、被使用人といふ關係ではなくて、親分子分の關係である。

△組織の長所短所

之が横濱の海上人夫の特色で、利害關係のみで結びつけられた他の労働組合に決して見ざる事の出來ぬ美風がある。近時の労働者階級に行はれがちな同盟罷工の如きは、絶えて起つたこともなければ又起る氣遣もない。その代り普通の労働組合とは、根本的に性質を異にした

是等人夫仲間から賃金の一部を積立てさせて、財團法人の救済組合みたやうなものを設立させやうとしても、それは到底不可能の事である。彼等の頭には自己の獨立といふ念が更にない。何處までも親方に頼りついて行くのである。

此の獨立心に乏しいことが、即ち親分子分本位の、一の缺點と云ふ事も出来る。兎に角此の制度が約半世紀續いて來た。若し現状のままに推移して來たならば、彼等の生活上に何等の刺戟も與へなかつたであらうが、突然世界的大戰が爆發した。外國船が入港しなくなつた。輸出が殆んど杜絶した。その結果大正三年の秋から翌年へかけての不景氣は彼等にとつて、未曾有の大打撃となつた。今までは一種の主従關係の情誼を以て誇りとした沖人夫も、流石にこの大打撃に對し

ては如何とも詮術なく、茫然として五里霧中に迷ふのみであつた。親方の方でも見込みのつかぬ前途を控へて、當もなく多人數を居喰させ、ておく譯に行かぬ。そこで喰詰つた海上人夫の一團は、新占領地の青島や南洋へ續々と出かけて行つた。が此頃又ポツ／＼景氣がついて來たので、彼等は大喜び、これで戦争でも濟んだら、どんなに懐中が温ることかと今から楽しんでゐるさうだ。

△海上人夫の生活

そこで沖人夫の生活費と云つては極めて簡單なもので、物價の高低に拘はらず、一食七錢の辨當である。假に一日一圓の收入として、親方に幾分頭を刎られたとしても、六七十錢は残らねばならぬ筈である。この残りの金が酒場と魔窟に運び去られるのだが、労働者の常として

已むを得ぬ事と云はねばなるまい。元より貯蓄などは夢にも思はぬ輩のことだから、射伴心の強い事は想像以上である。加賀町、壽町、水上署等へ擧げられる彼等の仲間はずべて賭博犯である。倉庫の中でも、船の中でも、波止場でも、街上でも、人夫共の三人と集つた所には、繩切と稱する賭博道具が取出される。恁くの如き生活状態の下にあつて、宵越の金を持つを耻とする彼等は、身體の見えなど一切構はない。いつも着た切り雀の印袴一枚で、石炭や油で汚れたまゝで、石川町や千歳町邊のバーに飛込む。其處で柄相當の太平樂を並べ立てる時の有様は、正に王公貴紳何かあらんやである。實に暢氣千萬なものである。

二十一 賣專賣局の女工

△誰でも出来る賣卷

女子の職業範圍が擴張した結果として、近頃では何處でも彼處でも婦人を採用する。女店員や女事務員は別として、どんな女でも最も取附易くて、随時に採用されるのは女工であるが、就中割のよいのは、賣專賣局の女工である。此の女工になる手続きとして別に六ヶ敷いことはない。満十四歳になれば誰でも構はぬ。教育があらうが無からうが、満足に手さへ動けばそれで出来るのだ。けれども経験のない者は、最初の二三ヶ月は見習で、それから工手、工長と進むのである。その給料は、日給と出来高歩合とに分つてある。日給の方は工長で

四十錢以上、一圓三十二錢まで、工手で十五錢以上、六十五錢まで。見習は六錢から二十四五錢まで貰へる。又出来高歩合は、賣を巻上げた數量によつて定められるのだ。それは千本につき四錢で、一日五千本巻けば手腕のよい方である。中には一萬本以上も巻上げる女もある。此の出来高歩合は各自の手腕次第であるから、少し熟練して来ると、日給よりも割がよい。友達同士で競争的にやつて勵み合ふから、存外早く上達するさうだ。

一日の労働時間は、日の長短に拘はらず、午前七時に始つて、午後五時の退け、一日十時間の勤務であるが、その内食事時間や正午の休息など差引くと、正味八九時間である。それに労働と云つても、別に骨の折れる仕事でないから、女の職業としては、先づ應はしい方である。

△工女の年齢と収入

仕事は簡単だから、無経験の素人でも早く覚えられて、相當の給料が
取れるので、他の工女よりは比較的志願者が多く、永く勤続する者も多
い。工女として最も多い年配は十三四歳から二十歳前後迄で、その次
は三十二三歳から四十歳位の年増である。廿一二から二十四五位ま
での者が一番少いさうである。既婚者で工女となつて勤続してゐる
者の中には、多くは夫婦共稼ぎといふ輩で、夫は男工自分は女工といふ
風である。三十二三歳頃からの年増の多いのは之れが原因で、二十歳
前後から二十四五の者が少くて、永く勤続する者のないのは婚期の娘
盛であるからであらう。それに三十七八から四十以上になると、仕事
も手に入り位置も昇つてゐるので、自然収入も多いから、之れに代る職

業を見附る事が却々困難であるから、永く勤続するのである。此處の
工女は平均一箇月の給料が幾ら位に廻るかといふに、人にも依るが工
手となれば大抵十圓内外、更に工長となれば十二三圓乃至十五六圓で
ある。

十四五歳の小娘だからといつて却々馬鹿には出來ない。卷上げの
出來高歩合で一ヶ月十五圓位稼ぐのがある。斯ういふ風に女の職業
が割合高い給料を仕拂はれるやうになつたので、猫も杓子も子守も奉
公や下女働きをしないやうになつた。朝疾くから夜の十時頃まで追
ひ使はれて、一ヶ月漸く二圓五十錢か三圓が關の山口は主人持ちとし
た處で女一人月三四圓で足りる。それも遠慮しながら食はなければ
ならぬ。他人の家氣兼氣苦勞をし乍ら下女奉公するよりは、氣樂で面

白く暮らせる女工になつた方が増した。のみならず収入も比較的多いといふので、下女子守奉公するものは追々と減じて來たのである。

二十二 製疊業と職工の收入

△機械疊床と手縫疊床

機械で疊床を造り出す事を發明したのは、伊勢松坂の疊屋中島といふ人であつた。最初に發明されたものは、其の權利を名古屋の太田なる人が譲受けて、太田式製疊機械と命名された。而して機械を賣るのが當時の目的であつたが、結果が思はしくなかつたので、後にはその機械で表付九十錢位の安物を製造して、ドシ／＼賣出してゐた。其の後疊屋中島はその上物の完全なものが出來ないのを残念がつて、更に勇奮

苦心研究を重ねた結果、遂に太田式よりも數等精巧な製疊機械を案出して、中島式製疊機械と名づけて特許を受けた。結局二種の製疊機械が生れて、盛に關西地方で歡迎されてゐた。それが愈々關東地方へも販路を擴張して來たのは、彼の明治四十三年の夏大水害があつて、一時に疊の需要が増加して人工の疊屋連中では急場の間に合はず、徒に轉手古舞をしてゐる際であつた。けれども太田式は餘り受けが好くなくなつた。それは縫方も雑であれば、縫糸も木綿を使用するので、常得意を有する疊屋には歡迎されないものである。一方中島式は縫糸も麻を用ひ、手縫の上物に比して決して決して見劣りのしない疊床が出来るのに受けないといふ理由は、單なる新舊思想の衝突ともいふべき、一部疊屋仲間の固陋な惡評からであつた。

△手縫と機械縫の暗闘

表附の畳職人は器用な者ならば僅々二年位で一人前となり了せるが、畳床職人となると却々さうは行かない。材料の藁の打揃へ、綴附など却々の呼吸と熟練を要する。幾年経つても畳床のブク／＼しない、弛みのないものを仕上得る迄には少なからぬ年限を修業に費さなければならぬ。それに此の床縫ひは始終塵芥は被らなければならず、腕節は要する、少し身體の虚弱なものには却々やり通せなく、強壯な者でなくば身を害ねる事が尠くない。其結果自然少し位の手間よりは、手取早くて樂な方といふ傾向を生み、漸次畳床職人の拂底を示して來るので、此間の消息を見越して、畳屋連中は小僧時代から多くの小僧を床縫ひに養成して、ドシ／＼畳床を造り出して仲間内へ供給してやら

うといふ考へで、多くの弟子を年期で入れてゐた連中が弟子の仕末に困り機械など据ゑる付けなくとも、相當の利益を見て行かれるといふ點もあり、餘り歓迎しなかつたのである。然るに機械疊が次第に勢力を擴げて行くので、自分の收益にも影響を及しさうに見えて來たので、自分等もその眞價を認めてゐ乍ら種々の口實を設けてケチを付けやうとしたものに過ぎないのである。

△機械製疊と手職の仕上

手縫ひでは一日で一人が六疊までは仕上得るけれど、それは縫方にも依る事で、普通一般に用ゐられるものは、一日に三疊が普通である。然るに製疊機では二人の職人が掛つて、一日四人分即ち十二疊は仕上得られるのである。之が普通の畳床では唯の四人分であるが、普通の

職人で上等の疊床でも機械では四人分出来るのであるから、上等品になるとズツと手間賃が安く附く。で、手縫と機械縫と比較すると、機械の方は上等品で二割、中等品で一割五分は安く上る事になる。夫で麻絲を使つて、中以下のものでも手縫のやうに出来不出来のない確かなものが仕上られる。而して完全なる機械の特長は麻絲を用ゐて絲の縮りが良く、絲の延びる憂ひがなく、上中下好み次第のものが普通の職人にも出来得る。中島式機械疊床は、一疊六十五錢からあつて中等一圓二十錢乃至一圓六十錢、極上で三圓五十錢止りである。太田式機械疊床は前述の如く縫絲には木綿を使ひ、縫方も雑である爲め、従つて値も安く、之れは道具屋向の安長屋や田舎行として、相應に需用されてゐるとの事である。中島式の製疊機は一臺二百六七十圓で、太田式製疊

機は百五十圓内外である。

△職人の所得

上述の如く手縫ひ疊屋は次第に機械製疊床に壓迫され、一方御大爽に際し、打續いて諒闇に遭遇したので、自然料理店割烹店等の主なる需要先が疊の仕入れを見合せたりした結果、一方ならぬ打撃を蒙り、一時は一本立で行つてゐた者までが顔の広い大店の下請けや手傳とまでなり下つた向も尠くなかつた。けれど諒闇明後漸次景氣も挽回し、御大典に際して一時に舊に復して來たりしい。職人の手間賃は普通疊床職が一圓以上一圓五十錢、表付けが九十錢以上一圓位まで、毎年十二月一日頃からは景氣不景氣に關はらず多少の値上げをするのである。景氣によつては十日頃に至つて再び十錢内外を値上げ、二十日か

ら大晦日迄は其上にも猶幾千の値上げをすることに組合で内定してあるさうである。

二十三 活版職工の収入

△新聞社附と工場附

印刷業は社會の發達と共に一年一年に其の進歩を示し随つて職工の數も近來著しく増加したやうである。今其の種類即ち新聞社附と工場附に就いて述べる事にする。新聞社附は工場附に比して勤務時間約二三時間も短いが就業中は極めて忙しく恰も戦争のやうである。先づ大抵は月給制度であつて普通植字工が十五六圓から二十二圓まで職長になると三十圓内外、外に手當として毎月二圓乃至六圓

の別途収入がある。但し新聞社は缺勤者があつても尙且出勤者だけで其日の新聞を纏めなければならぬから若し臨時に缺勤するものがある、月末に其日の分の給料を引去り、之れを他の出勤者一同に分與する慣習が行はれてゐる。

工場附は午前七時より午後五時迄の十時間を一日とし、大抵四五月頃から九月頃までを除いて、他は三時間乃至五時間の夜業がある。随つて職工の給料も日當時間割で、普通植字工は八十錢が最高で最低が五十七八錢である。

△職工の種類

一概に活版職工といつても右の如く新聞社附と工場附(一名臨時屋)との相違がある。で兩者を比べてみて氣風其他に、自ら相違の點を

発見するのは無理からぬ事である。今二者を通じて職工の種類を挙げれば、假名返し、文選、植字、解版、鑄造、機械等である。此中解版及び假名返しは少年女子にても出来る仕事で、極めて簡易なもの、現に何れの工場にても大抵婦女女子を使つてゐる。

假名返しとは解版工から廻して来た亂雑な活字の中から、平假名又は片假名或は數字の類を拾ひ出し、一定の活字棚へ『い』は『い』『ろ』は『ろ』といふ具合に選り分けて收めるだけの事で、いろは四十八文字と片假名五十音、それに數字を讀み得る者には何人にも出来る。賃錢は辨當持參で二十錢内外の日給假名返しが馴れると文選工に昇進する。印刷を終つた後活版面を解いて、活字の大小及び活字と活字との間の込物を選り分けるのが、即ち解版工の仕事である。大抵幼年工

か女工の仕事と定つてゐる。

文選工は又採字工ともいつて、讀んで字の如く活字を拾ふ職工である。活字棚に圍まれた中であつて、機敏に正確に必要な活字を拾ふのであつて、一に熟練の賜物だ。尤も活字棚の中の活字の並べ方は、字引のやうに扁で區分し、それから又同じ扁の字は更に劃の少いから漸次多いのに及ぼして行くやうにしてあるから大抵見當はつく。で文選工の給料は熟練の程度に依つて相違がある。先づ日給二十五錢以上四十錢位が通例であるが、文選工から植字に昇進する。而して植字工に昇進すれば活版職工の最高位に達した譯だ。

△鑄造と機械工

鑄造工は字母に依つて活字を製造したり、植字工が組み立てた活版

を紙型にとつて鉛板を造つたりするのが役目である。収入は文選工と植字工の中間と思へば可い。機械工は輪轉機又はロール機一名平版に依つて専ら印刷に従事する職工であつて、運轉手、紙取工、紙差工、インキ附の四種に別れてゐる。

蒸汽機械を備へた工場には石炭といふ原動力を有してゐるから、運轉手の必要はないが、ロール機を使用する小規模の工場では、運轉手の力を藉りて機械を運轉しなければならぬ。仕事は印刷機械の傍に立ち、車輪を廻せば宜いので極めて單純な代りに、他の職工に比して随分骨の折れる仕事である。賃金は晝間十時間の勤務で三十錢乃至五十錢、但し三食は工場で賄つて呉れる所もある。紙取工は運轉手程體力を要しないが、多少の熟練を要する。賃金は運轉手と似たり寄つ

たりである。平版機械の職工中最も高位置を占めてゐるのは蓋し紙差工であらう。一分間に幾度となく廻轉する機械に、活版面と適合するやうに紙を差込むので、却々熟練を要する。従つて賃金も高額である。大抵十時間六十錢から八十錢位。インキ附も多少技術を要するが、賃金は運轉手と大差がない。

二十四 手腕を要する結婚屋

△媒妁屋と料金

高等結婚媒介所なる名稱の下に、廣く嫁聲の仲人を營業してゐる結婚屋が、東京市内に、四谷の高砂社を筆頭に各區に散つて四十餘軒、出雲の神の支店顔に盛んに發展してゐる。果して文明が生んだ一現象で

あらうか、兎に角便利調法な世の中になつたとしても言つて置かう。之等媒妁屋の營業振は各多少の相違はあるが所詮は同じ目的に向つて進むのであるから大概何處も似つたり寄つたりの營み振りである。「幸福圓滿なる世を送るにはどうしても夫婦相倚り相扶けて、その天則に循はなければならぬ。而して此の關係は結婚に依りて成立するのであるから結婚は實に人生の重大なる要件——などと營業の主意を並べ立てた刷物を先づ申込人に見せる。媒介には誠意を以て努めるけれど、若し成立しない際には報酬は要求しないは極り切つた事として、申込料一圓會見料五十錢成功謝金は身分に應じて、豫め協定するとの附記こそ、此の營業の最大眼目とする處で、人を見て吹掛けるといふ謎なものであらう。

△結婚屋の營業振

申込者がある、先づ原籍、族籍、現住地、職業、氏名、年齢は勿論の事、學歴、係累の有無から、資産、月收、親戚關係、酒蕘の好き嫌ひ、其他希望の條件などを詳かにした申込書を提出させ、申込臺帳に記入した上、寫真の中から二三の候補者を選ばせ、其處で會見の日時を取定められる。それから會見俗に碎ければ見合、結納、婚禮と、さつさと運んで行つて、尙が着く。此の素人の仲人を煩はすよりも餘程手取早くて簡易な點が、或は現代の要求に適應した處で、又斯業の日に、繁昌に赴く所以かも知れない。營業の性質が性質であるだけに、斯うして相手欲しやの人達の目前に種々の寫真を並べ立て、讚めて見たり、勸めて見たり、其の上實物の見合に異性間の磁石力ともいふ可きものを利用して、一緒にす

るといふ商賣なのであるから、如何にも粹筋でまた罪な仕事であるやうに思はれるが、出雲の神の支店長は大抵揃ひも揃つて、苟くも人一生の重大事を引き受けるのであるから、却々に責任が重い。などと至極眞摯さうである。何しろ適當の組合せも考へなければならず、身元の調査も成る可く間違はないやうにしなければならず、會見して意氣投合しなければ何度でも骨を折らなければならず、婦人によつては衣裳を貸してやらなければならぬ場合もあるらうし、化粧の仕方、身のこなしも教へてやらなければならぬ事もあるだらうし、時には希望の高すぎる者には懇々説得して或程度まで譲歩もさせなければならぬだらうし、一人の美人を數人の男子に見合はせて競争させ其の間を巡つて漁夫の利を貪らなければならぬ事もあるであらうし、一旦縁談を

打破して益々執心の熱度を高めさせ、再び纏め返して自分の功にして報酬率も高めなければならぬ事もあるらうといふもの、或は散々骨を折らして置き乍ら常人同志勝手に外で妥協して了ふのに對しては抗議も申し込まなければならぬといふ次第で、傍で見める程粹筋でも容易でもないかも知れない。

△收益と手腕

斡旋の結果、滞りなく相縁奇縁が成立すると、媒妁屋が仲に入つて男から女へ結納金を贈れさせるやうになる事は、素人の月下氷人と變つた處はない。否、此處こそ大に彼等が手腕を要する瀬戸際なのである。結納金額を標準として三分の一乃至半額のお禮を花嫁方に請求する。故に花嫁に向つては可成結納金の奮發を促さなければならぬ。

其上成功の報酬は改めて豫定通り男の方から取るものであるから、一組纏めて五十圓乃至三百圓位の多額に上ることが珍らしくないと云ふ。普通は大抵一組二三十圓である相である。出雲支店長の俸給は大概それで推考されやう。それでも媒妁屋は依然として眞面目に『でも営業費が相應にかゝる。』と。規模を大きくして營めば儲けに比例して營業費も相應に嵩むは當然の事で、小規模な範圍で營めば單に廣告費位が重なる消耗費であつて、其他の費用に至つては數へ立てるまでもない。

二十五 露店の氷屋

△資本と準備

夏期暑い晴天が半ヶ月も續いたら優に一年間の生活費を儲け得るといふのが氷水屋である。而も準備等も至極簡易で従つて資本も僅少である事に比肩するものはなからう。露店開業の準備としては屋根なし屋臺に椽臺が二つ三つ、古ズクか古い引幕を縫ぎ合したのを竹でさしかけて日除けとし、椽臺には古物店でとも掘り出して來た毛布でも敷き、それに削臺とコツプ、コツプも舊式の水呑みが十二三もあれば可い。コツプは大と小とを備へて置く。勿論大といつた處が大した違ひは要らぬ、唯だ生意氣盛りの小僧輩に小父さん己は大だせと、威張らせる爲めに置くに過ぎない。準備といつた處で以上のやうなもの、一切合切取揃へて三圓か四圓で其他氷の仕入れに三四十錢も用意して居れば充分である。然し前述の如く屋臺だの椽臺だのと

比較的仕掛が大きいから一人では少し荷が勝ち過ぎる。夫婦位で營
めば屹度相應であらう。總べて露店には場所の擇び方が肝要である
が殊に氷水屋には最も密接な關係がある。青々と枝低く茂つた立樹
の蔭風通しの好い土堤の上豊かに満ちた水の邊など暑い日向を歩い
て来て吻つと一息吐くやうな處を擇ばなければならぬ。氷の仕入
は最寄の卸し屋に駆けつけて二百目が三百目づゝ買つて來れば宜い。

△氷水の製法と利潤

氷水は一杯小が一錢大が一錢五厘位が普通である。氷の塊を匏
の上で二三遍往復させると、コップには氷屑が山のやうに盛り充され
る。氷一斤が三錢としても二十杯内外は削けるから、アマの代を加へ
ても一杯の原價が僅か二厘五毛位である。それを一錢一錢五厘に賣

るのであるから一杯で九厘即ち七割以上の利益である。一日に百杯
賣れるとして大小平均一圓二十五錢の七割八十七錢五厘二百杯で二
圓五十錢の一圓七十五錢が純利である。一日に五百杯位賣れる事は
珍らしくない事で、恐らくこんな莫迦氣な嬴け口は他にない。ア
マの拵へ方はザラメ砂糖を煮詰めた蜜を水に適宜に溶かし一杯のコ
ップに甘茶の小柄杓で一杯入れ、ば十分であらう。

△アイスクリームの製法と収益

露店のアイスクリームの製法は、先づ水二升五合ばかりの中へ砂
糖一斤と鶏卵二個を入れ、それを亞鉛製の丸筒の中に入れて、是れを丸
筒よりも直径が五寸位大きな丸桶の中に入れ、丸筒と丸桶との間に二
三寸の餘地を保つやうにして、其間に雑用水と食鹽一升とを混じ、丸筒

を絶えず手で回轉すると丸筒の中の砂糖水は二三分で凍つて、アイスクリームは造作もなく出来上がる。色は食用の紅粉や黄粉を混するのであるが、今では色付をする商人は少ないやうで、中には卵も入れない者もある。二升五合の水が凍つてアイスクリームになつた處で、これがコップに七十五六杯は盛られる。コップといつたところが高さ三寸位、正味入り分は三分の一にも足りない位であるから、テニコ盛りにナスリ付けたところで知れたもの、大スプーンに一杯位のものである。以上の製法に依ると筒一本の原料が三十五錢内外に過ぎないのであるから、筒一本賣り盡せば一杯一錢として、八十錢原料を裕かに見積つて四十錢としても差引四十錢が利得である。手順よく行けば三返り位になるから、一回の原料で一圓以上一圓四五十錢の収益は確實

である。

二十六 汽車中の呼賣屋

△車室が店舗

常に汽車汽船等で旅行する人は誰しも経験のある事であるが、窓外の風物にも倦いて了ひ、自分の周圍に適當な話相手も見出し得なく、大抵同じ様な記事で満たされてゐる新聞は二種も見ると、新に買つて讀む氣にもなれず、徒然に苦しんで食ひ度くもないものでも食つて見ると、恁んな時に突然一人の男が車室の一角に立つて、大聲で辯舌爽やかに雑誌の呼賣を始める事を見掛けるのは珍らしくない。先づ一冊を十錢として置き、更に種々な口實で一冊二冊と増して行き結局五冊

も景品を附ける。場合が場合而かも餘りに安價なのでツイ客が買ふ氣になる。妙なもので一人が買ふと我も我もで忙しい位忽ち十人や十五人の客が得られる。それが僅か十分内外の間であるから素晴しい。斯うして一室が終ればサツサと次の室へ移る。元來斯業は鐵道規則からいふと禁止されてゐる事ではあるが、次席から次席へと相談的に買つて貰ふ分には毫も差支へがない。要するに乗客の安寧を妨げてはならぬといふ趣旨に悖らなければ可いのだ。此の呼賣には繪端書玩具發明品など商品は雑多であるが以下雜誌書籍類に就いて項を追つて紹介しやう。

△賣子と元締

東京を中心として日々汽車などへ乗込んで営業してゐる彼等の

間には、案外義理堅い組合が出来てゐる。そして淺草清島町竹島某、下谷御徒士町二丁目大山某の二人が其の元締をしてゐる。彼等の商品は總て此の元締の手で供給されるのである。で其の組合に加入すると直ちに姓名などが名簿に記載され、萬一組合員が病疾にでも罹るやうな事があると、全癒して再び營業に就き得るまでは、組合員が夫れ夫れ應分の出金をして、決して乾干になるやうな事のないやうに相互保全をやつてゐる。恚ういふ商賣仲間としては案外完全な組合を組織してゐると云はなければならぬ。それに其の元締なる人達が却々確固してゐて、組合員の或者が飛切つて商賣上手で、或者が非常に商賣下手である場合には前者から應分の出金をさせ、亦は自らが補助して後者に分配するといふやうに、頻りに獎勵の方針を採つてゐるので、自

然各自も熱誠に惟れ努めるといふ風である。

△商品の仕入と収益

一日平均一人が十圓の商ひをするとして、一組五冊十錢宛と假定し、一日に一人が五百冊賣子が百人とすれば日々五萬冊といふ巨額の雑誌や書籍が總て元締の手で集められるのである。此の巨額の雑誌が如何にして元締の手に集められるか、普通人には到底豫想も及ばぬ處である。目今東京のみで月々刊行される雑誌が何十何百種とある。其中には盛に賣行く雑誌もあるが僅か二三部しか賣れないといふ悲惨な雑誌が尠くない。その空しく店頭の塵に埋れる雑誌が驚く勿れ月毎に何十萬とあるのだ。各出版元では大抵發行の日より早きは二箇月遅くて四五箇月を過ぎると全部處分して了ふ。所謂數物で十貫

目何程といふ棄値で賣拂はれるのである。かうした賣物が月に何十回とある。中にも資金の豊かでない遣線専門の出版屋になると前月の雑誌類を今月の分が出ると直ぐ見切賣をする。之等の賣物が大抵元締の手で買占められるのだ。其十貫目何程で仕入れられた代物を五冊位景品として添へられた處で高々一錢五厘内外にしかならぬ。十錢の八割十圓の商ひをして八圓旅費を差引いても優に一日六圓の純益がある。如上の有様であるから資本といつても二三圓もあれば脊負切れぬ程仕入れられる。

△繩張りとは仲間入の手順

成る可く汽車賃の嵩張らない關係上、彼等の多くは新橋横濱間上野王子間飯田町新宿間兩國北千住間などを主なる繩張りとしてゐる。そ

して乗客の混む列車を見込んで乗込み、一日に何回となく上り下りを往復して巧に賣り付けてゐるのである。

彼等の仲間には相應に貯蓄をしてゐるものがある。それは當然の事であるが何しろ始終旅をしてゐる關係上、各地に宿泊する。而かも商賣が商賣で造作もなく金が儲かるのであるから、邪道に陥り易い。酒と女に身を持ち崩しては何程金の成る樹を持つてゐた處が三文の價値もない。折角勉強といふ肥料を與へて樹に生る金を砂利扱ひに溝へ捨てないやうに心掛くれば、分外の貯蓄の出来る事は火を賭るよりも明かである。

彼等の仲間入をするには其の元締方を訪ねて來意を通じ酒の二三升も買つて行つて「これからよろしく御頼み申します。与よろしい引

受けた確乎おやんなさい。」といふ位で、至極簡単に組合に加入する事になるのである。彼等の中には雑誌類の外に繪葉書を副業として賣るのもある。これは汽車ばかりではなく、隅田川通ひの巡航船に乗込んだりする。これは其の賣上高の幾分を汽船會社に納めることになつてゐるさうで、随つて鐵道の方のやうに遠慮は要なく、大ビラで商ひが出来来る。その繪葉書も同じく元締の手を経て仕入れられる。仕入方に就いては専門の間屋もあるが、賣子自身が直接に買入れたりする。と直ちに組合から除名され、雑誌の仕入れの途が失はれるのである。

二十七 謄寫屋と筆耕業

△裁判所の謄寫屋

民事では原告にも被告にも刑事では被告人の利益の爲めに辯護士が附く。何處の裁判所でも辯護士控所には、毎日多くの辯護士連中が集つてゐる。謄寫屋は即ち此の辯護士をお得意として、民事記録の謄寫や、訴狀答辯書、上告書などの淨書を引受けて營業するのであつて、代書業とは全然別種のものである。謄寫室に机を据ゑて居て、そこで書く事を謄寫すると云ひ慣はして来た處から、何時か誰言ふとなく謄寫屋なる名稱が生じて来たので、謄寫許りが仕事ではない。同一刑事事件でも五人も十人も辯護人を頼む被告がある。一事件でも性質によつては多数の共犯者があり、而かも夫等の被告が金満家連中であつた場合には、法廷は辯護士を以て埋る。斯んな事は敢へて珍らしくない事で、其際が此の謄寫の書入時なのだ。一事件に辯護士が五人十人

と附せられた場合、各辯護人は同じ記録を一冊宛持たなければならぬ。一看護人から記録謄寫願を出して、裁判所から借り受けた原本に依つて、辯護人の數丈け謄寫しなければならぬ。それが謄寫屋の手になる五百枚千枚の記録は珍らしくないのである。

△親方と筆生の收入割合

何處でも地方裁判所以上の裁判所には此の謄寫屋が大抵二人位控へてゐる。そして多数の筆生を雇ひ入れて、自分は辯護士控室を廻つて謄寫物の註文を集めて來たり、得意の増殖集金等を受持つてゐる。筆生の收入と謄寫屋即ち親方の收入との割合は各地に依つて、多少異なるであらうから茲には東京地方裁判所の例を擧げやう。

記録(半紙十行十六字詰)一枚の受負額が一錢七厘が相場であつて、一錢が筆生の収入となり、残額七厘が親方の収入となる。訴訟状美濃紙十二行十八字詰の受負が一枚に付二錢八厘内外で、親方が一錢三厘筆生が一錢五厘其他鑑定書の如きは、叮嚀に楷書でなければならぬ。受負額も値がよい。即ち美濃紙(八行十字詰)一枚が五錢で、親方二錢に筆生三錢である。而して紙代は總て親方持ちである。事件の少い時は無論閑散であるが、一度幅轉して來ると筆生は決して樂ではない。二日も三日も徹夜をしなければならぬ。親方と筆生の間は主従關係でもなく、隨つて勉強しても賞與も勿論なければ、どんなに上手に書いても値上げもしない。そして筆生は大抵夜間仕事は親方の宅でしなければならぬ關係上、相當の賄料を拂つて親方の家に下宿する。

△筆生の資格と収入

筆生の資格は只文字が小綺麗で、筆寫が速ければ誰にでも出來得るので、親方を訪ねて雙方談が合へば、保証金も保証人も要しない。であるから地方ではとにかく東京の方では、老書生の失職者、官吏の古手なども多く、其他相場町の食ひ詰め、御店の失敗者、銀行會社の使ひ込みなど、社會の劣敗者、いかゞはしい手合も尠くなく、寝たい時に寝、食ひ度い時に食ひ、錢が欲しければ徹夜も厭はず、働かず、缺勤しても届けも出さない。少し金が蓄れば無斷で姿をかくし、失敗れば再び來て雇はれる。それで親方も來る者は拒まず、去る者は追はず、式で平氣である。逆境中の一種の隠れ場の如き觀がある。服装に就いても何等の拘束もない。總てが自由手腕次第といふ風である。

如何に手腕があつても事件が少なく或は辯護人の入込みがなかつたら随つて収益が減ずる譯である。然しそれはどうしやうもない。けれど所謂石川や濱の眞砂は盡くるとも世に何とやらは盡きまじで事件の發生は生存競争の激烈に比例し而かも何々疑獄といふやうな比較的上流者の關係した事件が珍らしくない事は日々の新聞を見てゐる人は了解し得る事である。刑事記録などは一日優に五十枚は筆寫し得る。一月平均千五百枚の寫字料が二十五圓五十錢として親方が四割と見れば十圓二十錢筆生が六割の十五圓三十錢筆生十人を雇つてゐる親方は月收百二圓ある。訴狀鑑定書上告者など割合耕料の高なものも少くない。夜間も勉強すればそれだけ所得も多い。東京の筆生の中には毎月平均三十圓内外の所得がある者も少くない。中に

は十數年來眞面目に勤めて少からぬ貯蓄をしてゐる者がある。

二十八 倍も儲かる飲食露店

△求資の腰掛け

斯業の性質として永く營むのは好ましくないが、小資本者が相當の資力を得るまでの腰掛商賣として之れ位好箇のものは他にない。目下都下で有數な富豪××氏なども前身は飲食露店のおでんやであった。一生露店で終らうと思ふものもあるまいが、出來得る限り蓄財に努めて相當の貯蓄が出來たら直ちに他の有利な事業に就く方が可からう。比較的利潤の多いのに執着して、愚圖々々してゐては他の多くの露店屋と同様生涯を大道商人として終らなければならぬ。例

へ案外収益が多いとした處で發展の仕様がなないのである。
一體人間分けても下級な生活を送つてゐるもの程食意地の張つて
ゐるものはない。此種の營業が或程度まで景氣不景氣知らずである
のを見ても了解する事が出来る。飲食露店といつた處で一品六錢乃至
八錢の西洋料理を始めおでんや、鮎屋、天麩羅屋其他數種ある。中に
は滿更の素人では直様營み難いものもあるが要は體裁よりは味と分
量に心掛ければいゝ事は皆同様である。

△花柳街と屋臺店

花柳街と飲食露店とは離れ難いものゝ一つである。殊に東京では
吉原の仲の町の左右の横町に幾軒となく並んでゐる。四十軒内外も
あらうと思はれる中で、おでんや、茶飯、饅頭、水菓子屋、天麩羅屋が其の主

なるもので、就中おでんやが最も多い。夜の世界に夜の人を相手の夜
商賣人、老も若さも貴さも貧しきも、目的は一つの夜の街、あらゆる階級
の者が此の別天地に浮れ寄て来る。花の夕月の夜、劍菱をひつかけて、
矢大臣を極め込む徒、おでんかん酒に青緋の錢を握つて、腹掛の底をは
たく兄哥、株宵越しの錢を遣はぬ、俠心からそれら雑多の手合を唯一の
顧客として、水道尻の鐵棒の音、たそや、行燈の灯影に流れ行くそゝり節
の跡も消え終つた仲の町に、喧嘩の花も咲かず日に月に昔しからの仇
なる形の衰頹れ行く、吉原に屋臺店は昔の儘の姿を残して、昔の儘に榮
えてゐるのである。色廓にはどうしても無ければならぬものである事が
解るであらう。おでんやお馴染客は書生職人、其の他の素見客、茶飯
饅頭、は女郎や、妓夫が重なる客で、殊更夜の十時頃から十二時頃までが

書入時で、黒い夜の人の影が蟻のやうに集つてゐる。素見客を相手の露店一杯機嫌で登樓しやうといふ客、それらの景氣附になくはならぬ一の兵站部である事は、何地の色廓でも同じであらう。花柳街の外縁日などにも有望であらう。浅草のあくどい色彩と刺戟に憧れて夜毎に群れ集る人達が、際涯ある夢から空しく醒めて淋しく家路に就く、空腹を手軽に満す爲め、浅草附近に好適な場所を擇んで、夜毎に店を張るのも可い。

△露店の資本と収益

生涯飲食露店で身を終らうとする人はないとして、屋臺などは新規に造るよりは、損料で借る方が得策である。其他所要品材料などの仕入れには二十圓内外もあれば十分である。斯業者に就いて聞いてみ

ると、一夜の賣上額が三四圓平均が普通で、場所によつては五六圓の處も偶にあり、最も少い處で二圓平均と見たら、間違は無相である。純利も五割上手にやれば六割以上にもなる事があり、雨の夜や雪の夜には思ひがけなく懐中を肥し得る日もある。月に積れば大抵の店構への小店よりは、ずつと収入がよく、總べて現金である丈けでも有利である。尙種類によつては晝間行商して歩くのも可い。

二十九 資本の要らぬ有利業

△墨屋の大敵

確かに記憶してはゐないが、幾年前に、何雑誌であつたか、新案金儲けの手引とかいふ標題で、以て至極奇抜で便利ではあるが、一寸實行出

來相にもない種々な商賣を連載して、其の思付きの滑稽味に讀者を笑はしてゐた。其の數ある中に、何か新しい藥を發見して古疊の洗滌業を創めたら、一疊三四十錢も要する疊換の需要を幾分充し得て、定めてうける事であらうといふ「疊洗ひ」や鼠の脱穴塞ぎ、戸棚の繕ひ、棚の取付など、わざ／＼大工を傭うのも臆劫さうかといつて放棄つて置くも不便といふ随分よくある事實要求に應ずる爲め、所要の板やスキなどを車に積んで、戸毎を訪問して歩く「廻り大工」などがあつた。其の刺戟を受けて生れて來たのか、怎うかは知らないけれど、當時讀者の八分までが一笑に附してゐた廻り大工は、既に五六年前から著々實行されて相當の効果を收め、疊洗ひも最近に至つて愈々實現せられ、押すな押すなの好景氣に、徒に忙殺されてゐると言ふ始末、當時の讀者が成

程御尤もなど、一人で感じ入つてゐる處へ、「へえ今日は、疊洗ひで御座いますか——」など、入り込んで來る。二度と感じ入らずには居られない譯。

△簡単な疊洗ひ

古疊洗滌の旗上げは東京と大阪と殆ど同時であつて、夫々此に附屬した同業者がお互ひに鎬を削つて活動してゐる。旗上げに際して可成大袈裟な廣告が、各新聞に出た事を記憶してゐる人もあらう。東京では本郷區千駄木町附近に其の本社があつて、何でも某陸軍大佐の經營で帝國産業社といひ、市内に十數ヶ所の代理部を設けてゐる。其處へ開業方を申込めば頗る簡単な契約で成立する。其處資本金と云つた處で二三圓もあれば充分、其他準備も修業も要しな

い。何しろ洗滌薬と刷毛だけで總べて事足りるのであるから至極簡
 単だ。此の營業の眞の資本は要するに勧誘の巧拙にある譯なのであ
 る。當世は何から何まで外交員、勧誘員、萬能時代で品と商賣に依つて
 は資格も相應に必要であらうし、六ヶ敷くもあらうが、斯業の勧誘は何
 といつても簡單な性質のものであるから、純然たる素人でも、一遍の愛
 嬌と執着心而して辯口さへ明快であれば、他に差したる、駈引も特殊の
 技能も要らない。家主を始め、下宿屋、安宿、寄宿舍、其他中流以上の家庭
 を目當に、軒別に見本を持ち、或は實地に効力を示して、勧誘して歩けば
 可いのである。何分便利で廉くて、而かも其の効果が眼に見えるので
 あるから、大抵の家では面白半分にも承諾する相だ。

△單獨營業の場合

勸誘員も人夫も使役しないで、單獨でやる時は、自分で註文をとり亦
 洗滌も受負ふのは勿論であるが、それにしても一人一日で五十疊乃至
 八十疊は優に洗滌が出来得る。一疊の洗滌賃は一疊に付いて、縁染も
 入れて五錢乃至八錢が相場ではあるが、洗滌代に關しては本社でも代
 理部でも何等の干渉もしない相であるから、駈引によつては法外の利
 を收め得やう。假りに一疊に付、洗滌賃を六錢と見、仕事の課程を一日
 平均六十五疊と見積つて、六々、參圓六十錢に五六三十錢、合計參圓九十
 錢の内から、藥劑等の仕入代、金壹圓四拾錢、勸誘費及雜費として、貳拾錢
 を差引いて、貳圓參拾錢が押しも押されぬ純益となる。これが一箇月
 詰めて仕事があるとするれば、七十圓内外の収益となる譯であるが、さう
 は問屋で卸さぬは勿論で、雨天もあれば豫想外に、勧誘の不結果に終る

日もあらうといふもので外れつこのない處で一ヶ月平均廿日と見積つて尙四十圓以上の所得がある。此の世智辛い世の中に嘘のやうな金儲け大學出で何高等官吏が何と頗ぶる鼻息の荒い方々が呆氣にとられやう。

△大規模の洗滌業

營業の大小に依つて勿論一定しないけれど十人以上も人夫や勧誘員を使役するとすれば相當の店構も必要であるし事務費や雜費も嵩ばり單獨で營む場合の収益と同比例には行かないは勿論であるが範圍が大きければ大きいだけ所得の多い事は言ふまでもない。而かも其の資本に至つては他の商賣に比べて殆ど零に近い程の端金で加之も資本の寝るといふ虞もなく勞力一方の營業であるから其の容易で

ある事は他に比肩するものは無いと言つて宜からう。現に秋田地方を受持つてゐる或る斯業者は素全くの無資本であつたが昨今では人夫等三十人内外も使役して日々莫大の収益を得つゝあり益々擴張に努めてゐるといふ事である。假りに人夫勧誘共二十人を使役してゐるとして前記の單獨の場合の比例で計算すると月收凡そ九百圓に近い巨額となる。使役費其他を差引いても少からぬ所得である。左に詳に豫算を組んで見やう。

二十間使役人夫延數	四百人
同上洗滌受負疊延數	二萬六千疊
同上收入金(一疊に付六錢)	千五百六十圓
同上藥劑費	四百五十圓

同上延入夫賃	二百圓
勸誘員歩合支給額(受負額の二割)	三百十二圓
廣告費	四十圓
事務費及雜費	三十圓
勸誘員の賞與金	四十圓
收支決算純益金	四百八十八圓
以上は事實に近いものと信ずる。	

△勸誘員の収益と副業

東京の本社各區の代理部ではどしどし勸誘員を採用してゐる。苦學生や品性の良くないものは餘り歓迎しない相ではあるが直接志願して行つてお互ひに話が合へば直に採用され其の勸誘方面が定めら

れる。収入は勿論手腕によつて異なる事で豫じめ標準は定め難いが、本社や代理では大抵受負高の割乃至五分と内定してゐて、一ヶ月千疊即ち一日三十餘疊平均で注文を取つたものには若干の月手當を與へ、尙特別の成績を挙げ得たものには特別賞與金を與へる内規もある。多少手腕のある人であれば月收三十圓を下らぬ相である。斯業は外に藥劑其儘を販賣するとか下駄の表夏帽子藤椅子類の淨白を副業とする便宜がある。勸誘員の中には此の副業の方へ返つて力を入れてゐて豫想外の收得を得てゐる者がある。

三十 副業的の種苗販賣

△農家の副業に好適

種苗販賣業は都鄙共に可なり發展の餘地ある有望業であつて、地方の農家などが其の副業として格好なものである。而して種苗ぐらゐの利歩の強いものは他にあるまい。仕入高の二倍三倍はまだしも五倍六倍の利潤を生む事は敢へて珍らしくない。その需要方面は全國一般に亘つてゐるのだから心強い。然し、一時不正な奸商輩が現はれて大根種子の新種子を賣り盡したので、苦し紛れに幾年前の物だか解らないやうなものを販賣したりした悪例があつて、以後其筋でも綿密な注意を怠らないやうになつたのは着實なる斯業者にとつて誠に欣ばしい事である。けれども夫れが爲め一時は斯業者の受けた打撃は實に慘たるものであつた。其後漸次挽回して目下の處以前にも優つた有望の域に進んでゐるの觀がある。種苗の如きは植ゑて見て後、其の

良否が判明るもので、種苗の鑑別法も無いではないが、それは専門家に望むべき事であつて、一般には未だ至難の事である。故に大抵は種苗業者に依頼して購求する。然るに季節になつて植ゑて見ると、幾日を経るも發芽しない。檢めて見ると悉皆土中で腐れて終つてゐるといふ事實は決して尠少でない。

△種苗業の公德と責任

農業は季節が生命である。季節を逸しては好收穫は到底望まれぬ事になる。悪劣な種苗を購入した結果は、一箇年の收穫を全く棒に振るといふ悲惨な結局を見なければならなくなる事がある。斯業を営む者は善く公德を重んずるの責任を十分感じてゐなければならぬ。何種の苹果苗だといふので買ひ込んだ苗樹が別種類のツマラヌ苗で

あつたなどいふ悲惨な滑稽は随分田舎に於いて演じられてゐる。さなきだに不振なる我が農業界は、それら奸商輩の悪徳の爲に一層萎靡して、益々其の發達を妨げられ國家の經濟上に及ばず影響は決して少くないのである。それに反して十分公德を重んじて自ら戒心を怠らす種苗の選良に努め責任ある種子の供給を圖つたならば、營業上の信望は期せずして聚まると共に、一方には國家に對して大なる功績を擧ぐる事となるのだ。眞の成功は其處から生れ來るのであらう。

△營業法と資本

斯業は自ら農場を所有して、善良なる種苗を繁殖して廣く供給するとなれば相當の大資本も要するが、單に責任ある農園に就いて種苗を買込み、それを取次販賣する分ならば、四五十圓もあれば結構手廣く營

業することが出來やう。販賣の方法の最も簡易にして比較的効果を擧げ得るのは所謂通信販賣法である。當初季節向きの種苗定價表を作製して印刷に附し、廣告郵便を利用して先づ地方の一區域に頒布するのだ。其上に多少資金の餘裕があればその地方の新開地に廣告を同時に掲載すれば尙一層可からう。斯くして其の區域から注文の需要を充し、更に同一方法で他の一區域に及ぶ。此の方法を繰返し、販路を擴張して行けば、茲に基礎が出來、其の翌年から一つの株となつて漸次發展の途に就き得るのである。而かして益々健全に地歩を進め、自ら農場を所有して、種苗の選良に努めたならば、益々収益があらう。

三十一 本屋相手のせどり業

△せどりの種類

書籍類を取扱ふ營業の中で最も簡易な職業は俗に云ふせどりといふ商法である。資本も店舗もなく獨身で間借或は下宿してゐても營まれる。斯業の中にも同業者の間ばかり歩くのもあれば學校官署銀行等を廻つて、一新版物の見本を見せ乍ら注文を取るのもあり、其他古本のせどり新本のせどり等幾種にも分れてゐる。同業者の間を次々と廻り歩くのは即ち小賣店を廻つて品切品の注文をとりそれを發行元なり他の書店よりなり集めて來て供給するのである。甲の店舗と乙の店舗の有無を相通じ、或は隨時自分で見立て、之れを買取り、その

足で直ぐ乙の店舗へ行つて賣るものもある。假りにこゝに軟文學の本を主として取扱つてゐる甲書肆と硬派を主としてゐる乙書肆があり、若し甲書肆に漢文の歴史物や詩集などが出て荷厄介にし、乙の書肆には西鶴文集などの軟文學のものを持てあましてゐるやうな際に、甲の史書や詩集を安く買つて乙に賣り、乙の西鶴本を安く買ひ取つて甲に賣る。甲乙共に歡ぶばかりでなく此のせどりは一舉にして二重の利を生む譯である。

△収益と資本

何れの書肆も多少づゝは其毛色を異にしてゐる。此の毛色をよく呑み込んでゐて其の間で利するに努むるのみで、至極簡易ではあるが、古本のせどりは多少の古本に對する智識が必要である。それだけ新

本に比して利益が多い。それに古本の取扱ひは骨董的の物で、意外の利得を見る事が間々ある。古代の珍書で幾部か揃つて始めて高價なものがある。それが容易に自分の手許に揃つて来る事が珍らしくない。従つて古本せどりの収益は豫じめ標準を定め難いが、一割以上の利と見たら大した間違はあるまい。それに比べて新本の方は遙かに利歩が薄く、普通五分位ひで少し金高な書籍になると、三分内外の口銭である。併し、努めて勵んでゐる中には、小さい乍らも店舗も持つやうになり、同業者に信用も得られ、一歩々々途が展けるやうにもならう。今日の出版業者の八分通造は前身がせどり業者である事を見ても、有望な營業である事が解る。要するに斯業は地味であるだけに着實に地歩を進めて行けば失敗の憂ひのない事が特色とも言へやう。上述

の如き性質の方法である丈けに、資本金は全然無くとも營めぬ事もなし、二十圓でも百圓あつても可い。三十圓内外もあれば左程不都合を感ずる事もなからう。

三十二 乗るか外るか かの出版屋

△出版業と廣告法

出版業はどちらかと言へば投機的性質の事業で、出版したものゝ當れば一朝にして富豪の班に列し得るといつても過言ではない。その正反對に當らなければ目もあてられない悲惨な境涯に沈淪しなければならぬ。けれどそんな事は滅多にあるものではない。出版物が當る當らないは勿論需要者の要求に適不適が原因でなければならぬ。